
○月×日、今日は快晴

小声早田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

○月×日、今日は快晴

【Nコード】

N2031Y

【作者名】

小声早田

【あらすじ】

仁木杏16才。半年前に発売されたMMO、リクドー・オンラインをプレイしようと、キャラクターを作成し、さあ初ログイン！……で気がつけば、作ったばかりのキャラクター、ムキムキマッチョなおクトの体でゲームの中にいた。レベルは1、装備は趣味の悪いパンツ1枚。説明書は読まずに投げた。何も知らないゲームの世界で、ツングレのカイや猫耳の佐藤さん、その他の愉快な仲間達と出会い、なんとか現実の世界に帰ろうと、ゆるく頑張ります。

プロローグ 麗しのシユウコちゃん

「ねーちゃん、これやる？ ……………一応聞くけど、なにやってんの？」

ノックの音と同時に戸を開けた弟の修也が、顔の横で薄く四角いパッケージをひらひらと振って見せたとき、私はベッドの上で、筒状に丸めた布団の上に馬乗りになり、そのてっぺんに置いた枕に拳を叩き込んでいるところだった。

「返事を待つてから開けなさいよ。ノックの意味がないでしょうが」
問いには答えず、私はベッドから降りて、修也の元へ向かう。

「自分はノックもせずにあけるだろ」

失礼な。こう見えても思春期の弟を持つ姉として、弁えるべきところは弁えている。身繕いがあるだろうと思われる時には、わざと騒々しい足音を立ててから侵入しているのだ。

「それで、これ、なに？」

修也の指に挟まれているものを、顎で指し示すと、「ああ、そうそう」と弟はにんまりと笑顔を浮かべた。

「リクドー・オンライン。略してRO聞いたことぐらいあるだろ？」

名前に覚えはなかったが、おどろおどろしい怪物が赤い目を光らせている絵を見て思い出した。確か半年ほど前に盛んにCMが流れ

ていたはずだ。

「オンラインゲーム？」

「そうそう、一回やってみたいって言ってる」

そうだったけ？ と私は首を捻った。

もしかしたら言ったかもしれないが、CMを見ていて何とはなしに言ってみた程度だったのだろう。さっぱり記憶にない。

「でもなー。お金いるんじゃないの？」

弟がいるせいか、同性の友人に比べれば色々とやってきたほうだとは思うが、最近はどうにも興味もわかず、ゲームにお金をつぎ込みたいとはさっぱり思わない。

「それがさ、三か月分払っちゃってんだよね。4500円」

なに！？ 中学2年の弟に4500円は決して安い金額ではない。それを私に譲る気になったということは……。

「いくらで買ってほしいの？」

じと目で見ると、修也は二カッと白い歯を見せた。

「今なら三割引の3000円でお譲りいたします！ ソフト込みで

この価格は今だけ！」

「高い。2000円」

きっぱりと言い捨てると、修也は大げさに肩を落とした。

「んな、殺生な。ソフト代も入れたら一万近くになるんだぜ？ 頼むよ姉ちゃん」

情けない声で拝む修也に、私は「仕方がないなあ」と呟いた。修也が何故、大安売りしてまでお金がいるのか、その理由は分かっている。

この夏、修也には人生で初の彼女が出来たのだ。彼女と出かけるためにお金が必要、彼女との時間を捻出するために、ゲームをする時間がなくなったのだろう。

いつの間にか、私より高くなった、修也の目を見て私は微笑んだ。

「2100円」

慈愛に満ちた笑顔を浮かべた私を見て、ぱあつと顔を輝かせた修也は、その言葉にがつくりと肩を下げた。さっきよりも、位置が下がっている。

「私だつてね。そんなに余力はないよ。携帯代も馬鹿にならないし」

4月に晴れて高校生になりバイトを始めたとはいえ、両親と学校の許可がおりた、週2回3時間の近所のパン屋では給料もたかが知れている。念願だった携帯の通話料を払えば手元に残るお金はそう多くない。

というのは建前で、本音はこうだ。

馬鹿やろう！ 中坊が彼女をつくるなんて10年早いわ！ 年齢

|| 彼氏いない歴の私に謝れ！

浮かれて、やれプリクラだ、プールだと騒ぐ弟の幸せを、一分の曇りもなく祝えるほど、老成しちやいない。

清く正しく慎ましやかに交換日記でもしてろつての。

「2800円。絶対おもしろいから！ ジョブチェンジも結構自由だし、姉ちゃん、そういうの好きだろ？」

しかし弟もめげなかった。

結局、私と弟の攻防は30分に及び、2500円で決着を見ることになる。以前なら、2250円までは持っていったのに………幸せパワーは偉大だ。

「えーと、なにに。ここは剣と魔法が支配する大陸オールンド」

風呂上りの濡れた髪を、肩にかけたタオルでぎゅっとしぼる。説明書を片手に床に座り込みベッドに背を預けて私はブツブツと呟いていた。

「貴方は英雄になることを夢見て、様々な種族が集う街ロップヤーンにやって来た駆け出しの冒険者………めんどい」

分厚い説明書をぽいと投げ捨てて、モニタへと向き直る。

適当にやればなんとか出来るだろう、とコントローラーのボタンを押した。

画面に現れたのは、可愛いフリフリの服に身を包んだポニーテールの女の子。手には彼女の腕の力では到底振り回すことなど適わないであろう、巨大な剣が握られている。

くるくると回る彼女の足元に表示された文字を見て、私は眉を寄せた。

レベル69 名前Syuko

修也の意外な性癖を見た気がした。………この夏に出来たのはま

さか彼氏じゃないだろうな？

首を傾げて笑顔を浮かべるシュウコちゃんを横目に、私は迷わず New Game のボタンを押した。

ピロリンという軽い音と同時に、一瞬、カーテンの色が明るくなっ

た。あまりのタイミングの良さにびくつと肩が震えた。そのままの姿勢で固まっていると、数秒遅れて轟音が響く。雷か。一雨来るかもしれないなあ。結構近かったけど大丈夫かな？ でも、まあ、落ちるとしたら、はす向かいの斉藤さんちの斜め裏にある空き地にある木に落ちるだろう。

気を取り直して、お次は名前だ。

名前なあ。

オフなら「AAA」でもいいけど、オンラインじゃ被りそうだ。でも考えるのも面倒くさい。S y u - y a っ て つ け た ら 怒 る かな。 どうしようかなーっと、クキクキと首を捻った時、ふと、机の上にある卓上カレンダーが目に入った。

10月。

よし、それにしよう。「O」「C」「T」「O」と。

種族、性別、顔、髪型、髪色、肌色、など等、さくさくと設定していく。

名前はOCTO、種族は人間、性別は男、顔は初期設定のまま、髪は短髪、髪色は茶、肌色も初期設定。

うーわー。地味な仕上がり。

ボクサーパンツ一丁で仁王立ちしている、我が分身オクトの出来に苦笑しつつ私は決定ボタンを押した。

長くても3ヶ月の付き合いなのだ。そこそこ見られれば何でもよかった。

ウィーンと軽い駆動音。

画面が暗転し、次の絵がうつるはずだったその時、耳の側で大量

の皿を叩き割るような、とんでもない音がしたかと思うと、視界が白で埋め尽くされた。

真っ白だった。暗闇の中でふいに懐中電灯で顔を照らされたように、光以外何も見えなくなる。

目を瞑ろうとして、既に瞑っている事に気づいた。瞼を貫いて、容赦なく襲う光。目の奥で光の渦が濁流のように巻いている。眩しいじゃなくて、気持ち悪い。両手を重ねて顔を覆う。それでもまだ足りない。体が傾ぐ。力が入らない。足が震える。呼吸が出来ない。気持ち悪い。

光に解けていくように感覚が消えていく。藁にもすがる気持ちで伸ばした腕がつるりとしたものに触れた時、とうとう私の意識は途切れた。

どうも

ぶえつくしよい

くしゃみが出た。弾みで動いた体の下で、じやりつと音がする。

頭が重い。こめかみに手を当てると、その掌で目を押さえた。

また、あの光が襲ってきそうなのがして怖かった。ぎゅつと目を押さえて、光がどこにもないことを確認すると、少しずつ力を抜いていく。手をかざしたままそつと、目をあけた。

真つ暗だった。さつきは眩しくてたまらなかったのに、今度は何も見えない。

停電………したのかな？

雷はどこにおちたんだろう？ まさか家つてことはないよね？

一瞬、自分に落ちたのではないかと思ったが。別段体に痛みはないし、焦げた臭いもしない。むしろかびっばい臭いがした。

何かおかしい。

何でこんなに暗いのだろう。停電にしても何も見えないこんな暗闇になるだろうか。

それに、静か過ぎる。停電なんてしたら、すぐに家族が騒ぐはずだ。懐中電灯を探して、家の中を見回ったりするだろう。

背に当たる硬い感触はなに？

カビの臭いはどこから………。

「……………っ!？」

軽くパニックに陥りかけた時だった。

私は目を見開いてそこを凝視した。

遙か遠くにぽつと明かりが灯ったのだ。赤にも橙にも見えるそれは、形を変えながら、どんどんと大きくなっていく。

「なに……………」

喉から自分のものとは到底思えない低い声が出る。

その声にも驚いたが、今はそんなものに驚いている場合じゃない。ものすごいスピードで迫る明かりは、場所を移動するたびに、辺りを照らしてゆき、信じられない光景を私に見せていた。

ごつごつとした灰色の岩肌。ばらばらの間隔で立てられている柱。所々に生えた苔。そして

角の生えたばかりの獣。

食べられるかもしれないという恐怖がわかなかったのは、その獣の口にはくつわがかませられており、長い鬣の間から、獣にまたがる人の姿が見て取れたからだ。

……………多分、人。

推定、人。

希望、人。

いや、やっぱ、違うかな……………。

鈍色の毛の向こうにちらちらと見える、その人型のものは、全身を固そうな鎧に包まれていた。

唯一、鎧を纏っていない頭部に、によつきりと生えた、擦れた二本の角さえなければ私はその人型の何かを、人間だと認識できただろう。

タタンツ、タタンツ。と巨体に似合わぬ軽快な足音で近づいたそれは、私のすぐ側で急停止した。

獣上の人型の角のある何かがぐぐいつと手綱を絞ったのだ。

鞍に括りつけられたランタンがきらきらと光を放ち、辺りを照らしている。

身動きもせず、声も上げず、人型の何かが、獣から降りるのを凝視していた。

長い手足に驚くほど体にフィットした細身の鎧（脱ぎ着はどうや

ってするのだろう？)。髪と目は暗い赤色で、角は濃淡のあるクリーム色。

切れ長の目の縁には何やら不可思議な模様の刺青が入っていた。呆然と己を見詰める私を、人型の角のある何かも、じっと見詰める。

「……………」
「……………」

言葉もなくただただ見詰める。

「……………」
「……………」

いや、もういいじゃん。

無言のお見合いに早々に痺れを切らした私は、手をあげてひよこりと会釈をした。

「ども」
「……………ども」

うおおおおおお。言葉が通じた！？
人型の角のある何かは、日本語を解する人型の角のある何かだった！
通じた、嬉しい！ と喜んだその瞬間

怒涛の混乱に襲われた。

荒れ狂う、焦りと苛立ちと恐怖に体中を掻き毟りたいような訳の分からない衝動に駆られる。

じつとしてみると気が狂ってしまいそうで、私は跳ね起きると、不思議そうに首を傾げている人型の角のある何かに詰め寄った。

「何なの。何なの。あんた何なの!? ここどこ! 私どうなるの? 言つとくけど、顔は十人並みだし、寸胴だし、貧乳だし、あ、足には自信あるけどって何言ってるんだ私。ウソウソ足も駄目だから、偏平足だし、脛毛濃いから処理を怠ると大変なことになるし、それにお尻にはまだ蒙古斑が残ってるの! それからそれから、家は別に金持ちじゃないし、身代金なんか出ないよ。一番上だけ本物であるとは新聞紙の紙束持ってこられるのが関の山だから! あ! あとは、えーと、食べても美味しくなんかないからね! これだけは絶対! だって肉大好きだし、ほらっ、肉食の獣は食べても美味しくないとて言うじゃない? それに添加物とりまくってるし、食べたらお腹壊す事請合いよ。食べるな危険! 超危険! んでから、えーとっ、えーとっ。そうそう! 頭も良くないよ! 一見よさそうに見えるらしいけどね。全然違うから。見掛け倒しだから! 記憶力パーだし、理解力は雀の涙を通り越してミジンコの涙だし、応用力0だし! だから浚って脅して悪の研究させようったって無駄もいいとこだから。こういうの何ていうんだっけ? あ、あれあれ。骨折り損のくたびれもうけ。分かる? 意味ないから、無理だから、徒労だから、水泡に帰すから! でもって、あなた男だね? いや、雄って言ったほうが正しいのかな? あー、もうわかんない。わかんないけど、嫁にこいつってのもないからね。うん、ないないない。本当にありえない。料理できないし、子供苦手だし、裁縫なんてやらせたら、布と指縫い合わせて血まみれになるからね! アイロンかけたらかける前より皺増えるって評判の腕前だから。片付けは………わりと好きだけど、必要なものまで捨てちゃって後で『あ~~~~~』ってなる事何度もあったから。大事なものを捨てられたくないでしょ? だったらやめといた方がいい! 絶対いいよ! ああ、そうだ! 大事! 大事な事忘れてた! 私、生理不順だから

ら！ そうすると、ほら、排卵期もいつかはつきりわかないし。オギノ式なんてもつてのほかだし、安産体型とは程遠いし、多産の家系でもないし、生理痛きついし、だから、貴方の子供も絶対産めないと思う。種族違うしね。そんな角のある赤ん坊が通れる頑丈な産道はないから！ だから、産めよ増やせよには向かないの！ さらにさらに、私すごい性格悪いのよ。自分で言うのもなんだか、根暗。まじ根暗。一に根暗、二に根暗、三、四も根暗で五も根暗。貴方もその外見とダサイ………いえいえ、個性的なフアツションセンスのせいで孤立して寂しいかもしれないけど、話し相手には到底適さないから。謙虚さを出したくて言ってるんじゃないからね。今日だってむかつく男の顔を思い浮かべて枕をサンドバックにしてたんだから。クラスメイトなんだけど、毎日毎日からんできてほんと、うざい。あー、もう思い出すだけでうざい。別に一人寂しく本を読んでもうが私の勝手でしょ？ 彼氏いそうになくてなんなのよ。そうよ。いないわよ。それであんたに迷惑かけたかったのよ。友達も少ないわよ。どうせ暗いわよ。だからって懐中電灯で照らす馬鹿がいるかってのよ。お前小学生かよ。つか、その懐中電灯どっから持ってきたのよ。まさか私に嫌がらせするためだけに、わざわざ家から持ってきたのよ。ばっかじゃないの。ほんと馬鹿。救いようのない馬鹿。………って、あれ？ 微妙に話がそれたけど、とにかくあのチャラ男を思い出すだけで一晩中、枕殴れるほど根暗で執念深いの！ ほら、話相手にも異種族間交流の相手にも向かないでしょう！？ んで結局、あんたは誰で、ここはどこ！？」

思うままに喚きたてて、喉が痛み始めた頃、ようやく私はほんの少しだけ冷静さを取り戻した。

口を閉じれば、静かになった空間にピチヨンと水滴の音が木霊する。

息切れして肩を上下させている私を、じーっと冷めた目で見ていた人型の角のある何かは、ふうとため息をついて、面倒そうに口を

開いた。

「ここは久遠の洞窟で、俺は見てのとおりKAI。付け加えると、こんなナリなのは、ヤクシヤを選択したからで、話し相手も、嫁も、求めてないし、金を要求するつもりも、あんたを食う気もない」

「……………え？」

何か色々と突っ込みどころのある言葉を聞いた気がする。

「あんた、今来たばかり？ どうしてそんな格好をしている。装備は？」

人型の……………ああくそ、めんどくせえ。以下略でいいわ。は、人にはあらざる色の瞳を辺りにさまよわせた。

「来たって、どこに？」

首を傾げれば、人型の以下略は煩わしそうに腕を組んだ。

「ここにだよ」

「ここってどこ？」

人型の以下略のこめかみがぴくつとひくつく。

「あんた、人の話を聞いてなかったの？ それとも馬鹿なのか？ ここは久遠の洞窟だよ。くおんのどうくつ。分かった？」

私は頷いた。

「久遠の洞窟ね。それは分かった。で、その久遠の洞窟ってどこにあるの？」

人型の以下略は右手で顔を覆って大げさにため息をつく。

「ここは、リクドー・オンラインの中。久遠の洞窟は二週間前に発売された拡張パッチに入ってたダンジョンだ」

人型の以下略は、日本語を解する頭の残念な人型の以下略だった。

「あんた、俺は頭がおかしいと思ってるだろ。俺も最初はそう思ったよ。つーか、あんたに会うまで思ってた」

「

今現在もおかしいんじゃない……。

人型の以下略は、ため息をついて、乗ってきた鈍色の獣を振り返る。

獣はトラにライオンのたてがみを植毛して、カラーリングして、角をつけて、大きさを3倍にしたような姿をしている。

長いたてがみを指で梳きながら、人型の以下略は獣に寄りかかるようにうつむいた。

「あんた、さっきの話からすると、本当は女だろ？ 自分の体が今どうなってるか見てみたら」

「どつって……」

私は顎をひいて、自分の体を見下ろした。

そして、

「な、な、な、なんじゃこりゃああああああ」

絶叫した。

ない！

「なんで裸!？」

「いや、そこじゃない」

驚愕の叫びに、冷静な突込みが入る。

「あ、パンツはいてた。よかった……………って……………え？」

私は大きな掌で裸の胸をまさぐった。

「ない」

ぺたぺたぺたといくら手を這わせてもあるべきはずのものが無い。

「私の!……………私の!……………私の貧乳がないっ!」

「……………もう少し別の言い方はないのか」

私は大口をあけて固まった。

ささやかながら、確かにあった胸のふくらみは消え、むきむき胸筋と六つにわれた腹筋が、視界いっぱい広がっている。

「なに、これ」

呆然とする私に、人型の以下略が心底面倒くさそうに、だがどこか気の毒そうに声をかけた。

「あなた、ヒューマンの男を選択しただろ。髪も目も顔も、あなたが選択したとおりになってるはずだよ」

「せん……………たく？」

固まる首をぎこちなくまわして人型の以下略を見る。

「私、染みとりは得意じゃな」

「そつちじゃない」

私の言葉が終わるのを待たずに、人型の以下略のつつこみが炸裂する。

「せん、たく……………」

そういえば、と私は腰を覆っているパンツに目を向ける。

この黄色と赤と緑の斑模様は柄はどこかで見た覚えがある。つい、さつき 時間の経過がわからないから、多分、ついさつき、

私を作ったプレイヤーOCTOオクトがはいていたパンツだ。

ぱつと手をひろげてみれば、見知った私のそれより、ふた周りは大きな手が、逞しい腕の先についていた。

「オクトだ」

「それが、あなたのプレイヤーキャラクターの名前か」

「うん、そう」

「これで分かっただろう。俺達は、リクドー・オンラインの中にいるんだよ。作成したキャラクターの姿でね」

信じられない。到底信じられない。どうしても信じられない。

すつかり変わってしまった自分の体を見ても、やっぱり、まだ信じられない。

けれど……………信じなくてはいけないのだろう。これが現実でないのなら、私の頭がどうにかしてしまっただということになる。狂って

しまったと思うより、人型の以下略の言葉を信じる方がまだマシじゃないか。それがどんなに奇々怪々なことだとしても。

これは、夢か？

ちがう現実だ

これは、バーチャルか？

ちがうリアルだ

これは、キャラクターか？

ちがう私だ

私は 今 OCTOとして リクドー・オンラインのなかに
いる

「って信じられるかつ！ 何かっこつけてんだ、私は！ ぎゃー。
なにこれ。もうやだ。やだやだやだ。夢なら覚めて！ や、でも、
覚める前にこのパンツの中は見てみたいかも……………」

そろりと伸ばした手を、はしつと横から伸びた手が鷲掴みにした。
長い爪は珊瑚色でつやつやと光っている。ネイルいらすだ。

「あんななあ……………」

がつくりとうな垂れる人型の以下略は、はたから見ても気の毒に
思うほどに疲れた顔で盛大にため息をついた。

「気持ちはわかる。だが、俺達はこうして姿を変えてここにいるん
だ。いい加減落ち着いてよ」

人型の以下略さんの前だった。自重、自重。

私はぱつとパンツにひっかけた指を放すと、ちらりと人型の以下

略を見た。

オクトである私よりも、頭一つ分は背が高い。

「あの、人型の以下略さんも、ROをプレイしていたんですか？」

「そう」

長い小豆色の髪の毛を掻き揚げて、人型の以下略は首肯する。それから首をかしげた。

「……………その人型の以下略というのは俺のこと？」

え、そう思ったから頷いたんじゃないの？

「俺の名は見てのとおりK A Iだと言っただろう」

また、人型の以下略は引つかかる事を言う。

薄い唇の中には、良く見れば牙が伸びていた。

「えーと、人型の以下略改め、カイさんですね。あの、取り乱してすみません……………私の夢にしてはよく出来てるな」

前半はカイに向かって、後半は俯いてぼそぼそとこぼした私に、カイはもう、何度目か分からないため息をついた。

「夢じゃないと言ってるだろう。いい加減あきらめて認めてよ」

とりたてて頭は良くないけれど馬鹿じゃない。

私だつて段々と分かってきている。肌をとりまく空気の冷たさも、獣の生暖かい呼気も、耳をうつ水音も、硬く変わってしまった体も、どれも夢にしてはあまりにも生々しい。

けれど、目覚めて数分で認められるほどぶっとんだ思考も持っていないんだもの。もう少し動転させてくれてもいいじゃないか。

「ところで、あんた、装備は？」

「はい？ 装備？」

唐突にかけられた問いに、私は思わず自分の体を眺めまわした。

うほっ いい体だ

「防具や武器だよ。なんで裸なんだ。縛りプレイでもしてたの？」

ピシャーン

と、青い稲妻がカイの背後に落ちた気がした。

『縛りプレイ』

なんて卑猥な。何なのこの人、そういう趣味なの？

カイを見る目が明らかにおかしくなったのが分かったのだろう、彼はぽつと頬を染めて激しくうろたえた。

「ちっ、ちがう！ そういう意味じゃない！ あの、普通のやり方にあきた奴らが、その、よりプレイを楽しむために、えーと」

さっきまでの冷静さはどこへやら、しどろもどろに言い募るカイに私は冷ややかな眼差しを向ける。

「普通のやり方も未経験なんで、ちょっとそういう上級者向けのプレイのお話は理解できかねます」

「違つと言ってるだろ！ あんたっ！ 人の話は最後まで聞けよっ！」

ぎゃんぎゃんとわめくカイに、縛りプレイのなんたるかを説明し

てもらったのに、かなりの時間を要した。
本当はすぐに気付いたんだけどね。つい。

弱くてニューゲーム

「縛りプレイなんかじゃないですよ。始めたばかりだったんです」
「……………プレイ開始は街からだっただろう。倉庫にあった皮の服と、ショートソードはどうした？」

ダメージの抜けない憔悴した様子で、それでもカイは冷静に話を進めようと努めていた。実に涙ぐましい。

「いや、キャラクターこしらえて、ログインしようとしたら、雷が落ちてピカッて光って、気付いたらここにいたんですけど」

「まじか……………なら、当然レベルは」
「1です」

二人の間に、しんと、沈黙がおりる。

「ここは、二週間前に発売された拡張パッチに入ってたダンジョンだという話はさっきしたよな？」

「覚えてません」
「したんだよ！」

突っ込み終えたカイは、とうとうその場に座り込んでしまった。

「ここは最低でもジョブレベル60はないとやっていけない場所だ」
立てた膝に肘をついて、カイは気だるげに顎を乗せる。

「あなた、こここの敵に遭遇したら即死だよ」
「……………ですよね」

一気に降りかかったシビアな問題に、私は一言返すと黙り込んだ。レベル1で、裸族で、難易度高のダンジョンへって、どんだけムリゲー。

元の体よりは余程頑健そうな体は、きっと街の外の小さなしよほい敵を倒すだけで精一杯なのだろう。

対して、目の前で黄昏れるカイは、頭部を除く全身を堅そうな鎧に包まれている。

「あの、カイさん？」

「ああ」

呼びかけてはみたものの、なんだかこそばゆい。

「あの、キャラクターの名前で呼び合うのもおかしくありません？
本名は？ あ、私、仁木 杏といいます。歳は16で住所は「
ストップ」

自己紹介を始めた私を、カイは静かな声で止めた。

「あまり詳しく個人情報喋らない方がいい」

「え？ なぜ？」

「あんだ、オンラインゲームをやったことは？」

「えーと、モンスター狩人を400時間くらいと、悪魔ゲートは20時間で詰まって、GGは2時間で投げました」

指折り数えながら、今までのゲーム遍歴を思い出す。最近はおまりやっていないので一昔前のゲームばかりだ。

「なら分かるだろ。ゲーム内で発言するとどうなるか」

「え？」

ゲームで発言すると……文字が現れる。そして、その文字は、

「他のプレイヤーから丸見え」

カイは頷いた。

「そうだ。この世界や、他のプレイヤーが今どんな状況にあるのか、俺達には分からない。ゲームに取り込まれたのは俺達二人だけなのか、それとも他にもいるのか。今いるこの世界とゲームの世界はリンクしているのか。今も普通にゲームを続けているプレイヤーがいるのか。そいつらから俺達は認識されているのか。何も分からないんだ。なら、あらゆる事態を考慮して行動すべきだろ」

や、ややこしい。けど、確かに言うとおりで。それに、今も普通にゲームをプレイしているプレイヤーがいて、私たちの事が認識できているとしたら、

したら……

「私、さっき、めっちゃくちや言わなくても言いことを喋りまくったじゃな~~~~~い」

私は頭を抱えてうずくまった。

動揺して、かなり恥部をさらけ出した気がする。

「その、気にするな。ゲーム設定だと、同じダンジョン内の一定距離にいるやつにしか届かないはずだから。まだここまで来てる奴は少ないと……思うよ？」

ぼんぼんと肩を叩くカイの手が暖かい。頭を抱え込んでいた腕で、ぱっとカイの手をとると、強く握り締めた。

「本当に？ 本当にそう思う？ 私思いつきり本名まで………、いやいや今のは本名じゃないです。本名は山田京子ですから。聞いてますか？ どうかのプレイヤーさん。本名は山田京子ですから！ つか、カイさん、思いつきり疑問形じゃないですかあ！」

もう駄目。立ち直れない。

カイの手を握り締めたまま、私は地面にのめりこみそうな勢いで落ち込んだ。

ぴちよん、ぴちよん、と響く水音がさらに心を沈めてくれる。

「落ち込んでるところを悪いけど、ここから出ようと思うんだけど

……」

「異存はないです」

私に握り締められた手を、そつとふりふりして、取り戻そうするカイ。

その手放すまいと、ぐぐつと力を込めて胸元にひっぱりこんだ。

「おいつ、何するんだ」

よろけた、カイの赤い目がすぐ間近に迫った。

「私も連れてつてくれますよね？ 私、ここの敵にあうと即死ですから！」

必死の形相で迫る私からカイはぶいっと視線をそらした。

「見捨てていけるほど人でなしじゃない」

よっ、男前！

「よろしく願います。本当にお願います！ 本当もつマジで！
なるべく迷惑かけないように、逃げ回りますから！」

「いいよ。あんたは、出来る限り虎徹の背中に乗っとけよ」

「刀に？……………それはちよつと股が」

「あの騎獣の名前だよ！ 虎徹！」

カイは青筋を立てて立ち上がると、勢いをつけて、未だに手を握り締めた私を引き起こした。

「ほら、さつさと乗って」

乗って……………って言われても。目の前でかい虎もどきを見上げて、眉を寄せた。

あの鐙に足を乗せて鞍に跨ればいいんですね。

出来る気がしないんですが……………。

立ったまま大人しく待っている虎徹の体につけられた鐙は、私の臍に位置していた。

「カイさん。引つ張りあげるか、お尻を押すか、してもらえますか？」

背後でカイが息を吐く音が聞こえる。

是とも否とも答えず、私の横をすり抜けて、カイは手綱を引き寄せると、鐙に足をかけて地をける。

身軽な身のこなしで獣上の人となったカイは、ぐいっと手を差し出した。

「ほら、手を出して」

精一杯足を上げて鐙にかけ、手を重ねると、ぐっと握りこまれた。あっと思った次の瞬間には、

「……………なんで、そっちの足を鐙にかけた？」

私はカイと向かい合う形で虎徹に跨っていた。すみません。利き足だったんです……………。

ゲヘゲヘ

鞍の上で方向転換をして、私はカイの胸の中におさまった。
背後から伸びた腕が、器用に虎徹の口に噛ませた轡につながる綱
を操る。

「カイさん？」

「なに？」

「カイさん、どうしてこんなのを操れるんですか？」

「さあ」

「さあって……………」

首を捻ってカイの顔を見る。赤い目はただ静かに暗闇に包まれた
前方を見据えていた。

「俺も、あんたと同じ。プレイしていて落雷の音がして、気がつい
たら、虎徹に乗ってここにいた。虎徹の乗り方も、槍の扱い方も、
魔法の使い方も、『カイ』が覚えていることは出来た」

こっちは素っ裸で、洞窟の地面の上に寝転がってたつてのに、防
具に武器に魔法に乗り物つきか。

「カイさん？」

「……………なに」

「予備の装備もってませんか？」

「ない。全部倉庫の中」

「そうですか」

「持ってても、俺の装備じゃひよっとしたら……………」

言い淀んだまま、ふいに口を閉ざしたカイは眉根を寄せて、首を捻る。

「したら？」

「……………いや、今はいい。それより早くここから出よう。前を見て。走らせづらい」

はい。と私は大人しく、カイの言葉に従った。

タタンツタタンツ

虎徹が跳ねるたびに、上下にぶれる視界。

鞍の上にあっても、脚に力を込めて虎徹の体を挟みこまなければ、体が浮いて振り落とされそうだ。私が、杏のままであったなら、とうに酔って、力尽きていただろう。オクトの体に感謝だ。

「カイさん？」

「……………なに」

「カイさん、いくつなんですか？ それぐらいなら聞いてもいいでしょう？ あ、あと、中の方は女性だったりとかしません？」

時折妙にソフトになるカイの口調に、私は希望を込めて尋ねた。どうせなら、同じ境遇の方が心強い。

「……………歳は、あんたより下。それから本来の性別も男」

嫌な質問を聞いたというように、答えるカイの声は低い。

「へえ。カイ、年下なんだ！。落ち着いてるからってつきり年上かと思っただ」

「あんた、俺が年下だと分かった瞬間にそれ……………」

カイのため息が頭にかかる。

「だって、年上に畏まられると気を使うでしょ。という気遣いなんだけど？　ところでレベルは？　レベルはいくつ？」

「今は魔道騎士の99」

なんだか色々と諦めたようなカイの声。

「ほおー、それってひょっとしてカンストしてる？　カイってネットゲ廃人なの？」

背後の体がぴくつと反応して固まった後、脱力するように力が抜けるのが分かった。

「あんななあ。聞いちゃいけない質問つてのがあるだろ」

ははは、ごめんね。いや、心強いよ。と言って脇を通る腕を鎧の上からぽんぽんと叩くと、またため息が頭にかかった。

どのくらい虎徹で駆けただろうか。まだ然程距離を進んでいない気もするが、代わり映えのない洞窟の土壁が続いているからそう思うだけで、実は結構走ったのかもしれない。

「カイ」

「……………なに」

どんどんと、投げやりになっていくカイの声。

でも、今はそんな事はどうでもよくて、私の意識は、目の前にどどんと立ちはだかる巨大なアレに集中していた。

「あれは、なに？」

「敵」

「いや、それは分かるけど」

「センジョ・レクス。攻撃を受けると背中 of イボから四方に毒液を撒き散らす。得意技は」

「ジャンプアタック……!?」

「正解」

でっぴりと太った体からは想像もつかない華麗な動きで、巨大なヒキガエルは洞窟の天井すれすれの位置まで飛び上がる。ゲヘゲヘという下卑た鳴き声が気持ち悪いことこの上ない。

その白い腹の真下には、虎徹とカイと私。

「しっかり掴まって」

言うなり、カイは器用に手綱を操って虎徹を真横へと飛び退かせた。

「ど………こ………に………」

絶叫しながら、獣の体をはさむ足にこれでもかというほど力をいれ、鞍の縁に指を食い込ませる。せめて綱を持ちたいけれど、そんな事としてはカイの邪魔になると分かっているから持てない。

さらに、前方へと一回ジャンプした後、くるりと向きを変える虎徹。

「無理！ 無理無理無理！ 落ちる………」

「黙って、舌かむよ」

片手に手綱を持ちかえると、カイは鞍に括りつけてあった、槍に手を伸ばした。

「獄灼炎！」

ぼつと槍の穂先に青い炎がともる。

「伏せてて」

怒鳴ると共に、返答も聞かずに、カイは虎徹をゲヘゲヘに向かつて走らせた。

えええええ。逃げようよ~~~~。と主張したいが、喋ると本当に舌を噛みそうだ。

私に出来る事といえば、振り落とされぬように足に力を込めて、指示通りに虎徹の背に腹ばいになるしかない。「虎徹ごめん」と心のなかで断りをいれて、長い鬣を掴む。

それから事は伏せてたから見てない。

ザシュツて音がして、ゲヘツて鳴き声がして、また虎徹の体が180度回転して、さらにズボツって音がして、ゲヘーって断末魔が聞こえて、「アイギス！」と叫ぶカイの声がして、キンって硬質な音が耳を打ったと思えば、ざばざばざばと豪雨が降り注ぐような音がして、しーんと静かになった。

虎徹の荒い呼吸にまじって、背後でカイが2〜3度深く息を吸い込む音がした。

「もう、顔をあげていい」

あんまり、あげたくない。

「見ておいたほうがいい」

ゲヘゲヘの死体を!?

……車にひかれた小さいカエルの死骸でさえ、あんなにぐろいのに、こんな特大サイズのカエルのなんて。

「はやく、消える」

「消える？」

訳の分からない急かし文句に、私は涙目になりながら、そっと顔を上げた。

でろんと長い下を伸ばして目をむいて息絶えたゲヘゲヘ、その横っ腹にはカイの槍が深々と突き刺さっている。

やっぱりグロイ。

目をそらす事も出来ずに、ゲヘゲヘの亡骸を見詰めていると、つつと頭上から紫色の液体が滑り落ちてきた。

……滑り落ちてきた。空中の何もないとところを、さもそこに何かがあるように、紫の液体が後から後から、流れていく。

「なに、これ？」

「アイギス。毒を被らないように、シールドをはった」

ほほう、それは便利。

カイを中心に虎徹をもすっぽりと覆っているらしい、シールドを滑り、紫の液体は綺麗に円を描いて落ちていく。

「ほら、もう消えるよ」

「なにが？」

あれって踏んだらまずいのかな、等と、どんとどんとたまる紫の液体に目を凝らしていると、後ろから伸びたカイの手が、くいつと顎をつかんで、顔を上げさせた。

「センジヨ・レクスが」

それは異様な光景だった。

ぬらりと光るゲヘゲヘの体から、しゅうしゅうと音を立てて白い煙が上がっている。

白い煙に包まれたゲヘゲヘの体は、その表面から、まるでパズルを分解していくように、ばらけて、蒸発していた。

ゲヘゲヘは、言葉どおり消えていこうとしていた。

こんなところでも格差社会

もうもうと立ち込めていた白い煙が消え去ると、ゲヘゲヘの骸があった場所には、槍と、大小様々な金貨銀貨と、根元を紫の紐で縛られた葉っぱが二束落ちていた。

おびただしい量の紫の液体も、勿論消えている。

「カイ」

呆然と、今日の前で起こった出来事の行く末を見届けてから、私は重たい唇をゆっくり動かして、背後の人の名を呼んだ。

「なに」

頭上に落ちた呼気には、もう乱れがない。

「あれなに」

「金だな」

私が指差した先を見て、カイはきっぱりと告げる。

「あの葉っぱは？」

「多分、毒消し草」

「どうやって使うの？」

「さあ」

どうやら、まだカイも使った事がないらしい。まあアイギスが使えれば、毒を被る心配もないし、使用方法に頭を悩ませる必要もないのかも。

「あれどうするの?」

「一応拾っとく」

するりと虎徹からおりると、カイはしっかりとした足取りで、ゲヘゲへの遺骸跡へと向かう。

まず槍を拾い上げ、それから金貨と草を手にして戻ると、虎徹に括りつけられている袋の中へ、それらをぞんざいに投げ込んだ。

チャリンチャリンと音がするはずの袋は、ずっしりと重みがありそうだ。

「幾ら入ってるの、それ」

「多分だけど15,038,642ゼルギー。この状態になる寸前が15,033,942ゼルギーで、16回敵に遭遇して硬貨を拾った。今までの報酬からかんがみて、硬貨の種類と価値を適当に検討つけて計算したただけだから、確証はないよ」

ふうん、1500万ですって、奥さん。

「牛丼一杯、何ゼルギー?」

「知らない。最初の街でショートソードは一本150ゼルギーだった」

その150ゼルギーの、初期装備の剣一本持っていないレベル1の私と、1500万ゼルギーに超強そうな装備一式そろった、レベル99のカイ。

何この格差。ウォール街のデモに参加しときゃよかった。

「ねえ、カイ」

「なに?」

「カイってかなり細かい性格？」

割り勘は一円単位まできっちり請求します。みたいな？

「……………一桁まで金額を覚えていたことについて言ってるなら、たまたまメニユーを開いた後だったから覚えてただけ」

ほら、もう行くよ。前へつめて。とカイが虎徹の鎧に足をかけ、ひらりと飛び乗る。

会ってから、それほど時間も経過していないというのに、カイが少しの間離れていただけで、背中がすーすーするように感じていた私は、背後に戻ったカイの気配に安堵した。

「カイ？」

「……………なに」

「もう一つ聞いていい？」

「もったいぶらないで、さっさと聞けば」

くつとカイが虎徹の手綱を引けば、自分の足では体感出来ない速さで風景が流れていく。

「あの恥ずかしい技名は叫ばないといけないもんなの？」

「……………」

びゅうびゅうと風を切りながら訪ねた問いは、黙殺された。

ゲヘゲヘに始まり、ニヨロニヨロに、ブヒブヒ、ジメジメに、ノソノソと、湿気の多い地帯を好みそうな、きもい系の敵に遭遇し、必死に虎徹にしがみついて、カイが槍をふるう事、十数回。見たくない見たくない。もうここの敵は見たくない！ とげっそりし始め

た頃、私たちはそこへ来た。

「カイ」

「多分境界線」

あ、なんだ。今度は「なに」じゃないんだ。

私たちは虎徹をとめて地面に走る一筋の白い光を見つめていた。洞窟の岩壁と、この柱意味あんの？ と聞きたくなるような崩れた遺跡のような柱と、グロ敵しか目にしていなかった私たちが新しく目にしたもの。それが今、足元に走る白い線だ。

「これを超えたら洞窟から抜けれるのかな」

「中層に移動するだけだと思う。今までの敵は下層の奴らだったから」

カイの言葉に私はがっくりと肩を落とした。もう、もう、湿気過多とテラテラ光る系の敵は嫌だああああ。

「中層はまだましだと思う」

「かわいい小動物系の敵が出てきたら、それはそれで嫌だ」
「まあね」

私は、首を傾けてカイを見た。

本当は、小動物ならまだいい。

人型の敵が出てきたら、カイはどうするのだろう。

「カイ」

「なに」

あ、元の会話復活。

「倒したくない敵が出てきたら全速力で逃げよう」

赤い目が数度、瞬いた。

「……………そうだな」

洞窟内では逃げるのも難しいかもしれないけれど、そこは、まあ、ガンバレ虎徹。

ポンポンと首筋を叩くと、虎徹はグルウウウと甘えたような泣き声をあげた。

「越えるよ」

「うん」

私はごくりと唾を飲み込んだ。

初めてのマップ移動（但し洞窟内）だ。

線の向こうは、今までの岩壁ではなく、茶色い土壁に変わっている。さらに、誰がともしてんの？ と小一時間問い詰めたいたランタンの灯りが、ぼつぼつと等間隔に光っているのが見えた。

敵の姿は見えない、けれどカいは手綱を片手に持ち代えると、槍を握り締めた。

ひゅんひゅんと、感触を確かめるように空を切る刃。

やや控えめな声で「アイギス」と呟いてカいはシールドをはった。……………あれから技名を口にするときはずっとこんな調子です。ごめん。思う存分叫んでもいいんだよ。

すつ、とカイが息を吸い込んだ。ぴりぴりとした空気が背中に刺さるようだ。

胸が痛いほどに早鐘を打っている。

虎徹が太い足を踏み出した。

佐藤さん！？

ガキイイイイン、と今まで聞いた事もないような音が洞窟内に鳴り響いた。

イイン、イイイン、イイインと、音の尾が壁を駆け巡って、どこまで反響していく。

耳をふさぎたくなるその響きのなか、パラパラと、見えざるシルド、アイギスが壊れていく音を聞いた。

今の今まで確かに何もいなかった、ただ洞窟が続いていただけの光景は、しかし線を越えた途端に一変した。

線を越えるとすぐに、真っ白な光につつまれ、先の音に見舞われたのだ。

「伏せ！」

私は犬か！！ と突っ込みたくなるような号令が下され、素直に虎徹の上にへばりつく。もう、この体勢もなれたもので、目線だけをあげて前方を目視する事が出来るようになった。

ぐいんと、虎徹が弧を描くように、次々と土を蹴って移動する。

「くっ」

カイの口から苦しげな息が漏れた。

アイギスを一撃で破壊し、カイが、伏せ「て」を付け足す余裕がないほどの強敵が現れた。

なんでええええええ。

下層より中層の敵のほうが強いつてどういうこと！？

ぼひゅんぼひゅんと音を立てて飛来する火の玉を、カイが槍で切

り落とす。……切り落とす。なんで切れちゃうの!? とか、突っ込んだら負けだと思ってる。

もうもうと舞う土ぼこり。喉は排ガスを思いっきり吸い込んだ時のようにいがらっぽく、目には涙が浮かぶ。

ゆらりと黄土色の膜の向こうに、影がゆらめいた。

小さい!?

私は、その影を信じられない思いで見詰めていた。

二足歩行、きちちゃったよ……。

背後を振り返ってカイの表情を確認する余裕はないが、強く躊躇しているのが全身から伝わってくる。

「逃げよう」

零れた声は泣き声に近かったと思う。

だって、アレは……子供だ。

ゆらり、ゆらり、と歩行しながら、薄くなる土煙の中から、姿を現しつつある影は、私の腰ほどまでの丈しかない。

どうみても子供にしか見えなかった。

「カイ、逃げよう……カイ!!」

タタンツタタンツと、虎徹を駆るカイ。

しかし、影の周囲を飛び回らせるだけで、退こうとはしない。

「カイ!!」

私は悲鳴をあげるように名を叫んだ。

とうとう、影が姿を現した。

丸い頬。錫杖を握る小さな手、サラサラと流れる肩までの髪、そして、頭部についた……猫耳。

なに、あれ、可愛い。

くりつと丸い目はつり気味で、ぽやんぽやんの頬には渦巻き模様。短い足には不釣り合いなほどに大きな靴は歩きたびにカポカポと音をたてる。

人ではない。人ではないが、限りなく人型だ。いくら死体が消えるとはいえ、あれを斬るのは……………

「……………さん」

手綱を握る腕に手を這わせようとしたとき、カイがかすれた声で何かを呟いた。ピタリと虎徹が跳躍を止める。

その間にも、目の前の、なにあれ可愛いな生物はぶつぶつと唇を動かして、手にした錫杖が淡く光を放ち始めた。

これでもかというほど長い尻尾は毛が逆立って、小刻みに揺れており、どう見ても怒っている。

やばいっす。まじでやばいっす！

アイギスはない、カイは放心のこの状態。

お母さん、先立つ不幸をお許してください。私のPCはトンカチで叩いて壊してから破棄してください。あと本棚の右端上にある辞書のカバーは外さないで下さい。

ぶるぶると震える頬に、目尻にたまっていた涙がするりと落ちた。どんどんと強さを増す錫杖の光。眩しさに目を細めた時、背後でカイが叫んだ。

「佐藤さん！！ 俺です！ カイです！！」

あら、お知り合い？

私は、はたと前方の、なにあれ可愛いな生物を見詰めた。

ええええええ！？ あれ、お知り合いですか？ プレイヤーです

か？ 何で攻撃してくるの！？

はっ、そうか、あれが噂のPK？

私は、ほんと頭のなかで手を打った。

や~~~~め~~~~て~~~~。私を攻撃しても一文の得にもならないから、なにせ、まっばだから、無一文だから！ 後ろの人は色々もってるみたいだけど、何も知り合いを殺るこたあないでしように！

「佐藤さん！ 佐藤さんですよね！？ 俺ですよ、カイです！」

血を吐くようなカイの叫び声に、なにあれ以下略が、ぴくりと体を揺らした。

「カ……………イ？」

しゅうつうつうと途端に光を失う錫杖。

最後にぶすんつと音を立てて、光が消えると、なにあれ以下略はカランと地面に杖を転がした。

「カイ？ カイ？ カイなのか？ 本当にカイなのか！」

ぼろぼろと大粒の涙をこぼしながら、なにあれ以下略はその場にごくんと膝をついた。

ぱつと虎徹を降りたカイが駆け寄って、小さな肩を両手でつかむ。

「そうです、カイです。佐藤さんもここにきていたんですね。ひよつとしたらそうじゃないかと……………」

「カイ……………。そうか……………僕だけじゃなかったんだな。……………っ。くそっ」

力なくカイの言葉に答える佐藤さん？ は眉を寄せてぐつと唇を

噛み締めた。

「何てことだ。僕だけじゃないとしたら、まさか、まさか、他にも僕達のような人間がいるのか!？」

感動の再開を果たしたらしい二人の側に、よじよじと虎徹から降りて、近づく。

「あゝ。オクトと申します。はじめまして、佐藤さん」

その他にもいる人間です。

ぱつと顔をあげて私を見た佐藤さんは、次の瞬間、だつと地を蹴って、錫杖を構えた。

「え、あの……佐藤さん？」

ブイインと再び光を放ち始める錫杖。

まさかのPK再び!？」

「佐藤さん!! 彼もプレイヤーです。俺らと同じなんです!」

「……なに……に?」

佐藤さんは眉をひそめて私を凝視する。

え、てか、私「彼」扱い?

「……しかし……なぜ」

裸なんだとおっしゃりたいんですね。

「今まさにゲームを始めようとしていたところで、倉庫に行く間も

なくここに飛ばされたんです」

「そ、うなのか？」

と、佐藤さんは、何故か私でなくカイに顔をむけて尋ねる。カイはこくと頷いた。

「下層で倒れているところを見つけました」

「そつ……………か」

ようやく納得してくれたらしい佐藤さんは、ぶんと軽く杖をふって戦闘態勢を解除する。

「あの！ 佐藤さん。始めまして、オクトと申します」

私は、未だどこか焦点の合わない佐藤さんに向かって深々とお辞儀をした。

「あ、ああ、佐藤だ。よろしく頼む」

くいつと中指で何もない眉間の前を押し上げる佐藤さん。

空をきる指に、はっと、顔を離して、己の手をまじまじと見詰める。

どうやら中の人は普段眼鏡をかけているらしい。

力なく首をふる姿に、何ともいえない悲哀を感じる。

性別の変わってしまった私もたいがいだが、こんな、なにこれ以下略な姿になってしまった、カイの態度からして恐らくそこそこの年齢の男性だろう佐藤さんも哀れだ。

「こちらこそ、よろしく願います」

につこりと微笑めば、悄然とした笑みが返される。

ずつと、一人でここにいたのだろう。

震えの止まらない指先が痛々しい。

早々にカイと出会えた自分の幸運を、私はこのとき思い知った。

「佐藤さん、虎徹は？」

「あ、ああ。この先の窪みに置いてきた」

まずはそこまで戻りましょう。と虎徹の手綱を引いて歩きはじめるカイ。

そのあとに続こうとした佐藤さんの手を、私ははっしと掴んだ。

びくつと肩を震わせて振り返る佐藤さんに、私は一縷の望みをかけて言葉をかけた。

「予備の装備、持ってませんか!？」

と。

せめてばら見をしとけば良かった

「装備？……あ、ああ、そうだな。何かあると思うが」

怪訝そうに眉を潜めた佐藤さんは、私の格好をまじまじと見詰めて、納得したように頷いた。

佐藤さんの虎徹はゆるいカーブを曲がった先にある窪みに、ちょこんと座って待っていた。

見た目はカイの虎徹と全く同じで私にはさっぱり区別がつかない。……おそらく佐藤さんにもカイにもつかないだろう。

「えーと、装備だったな。ああ、あった。あつ！」

「ごそごそと虎徹2号に括りつけられた袋を探っていた佐藤さんは、あからさまにしまったという顔をして、私を見、また袋の中を見る。

「どうかしたんですか？」

袋の中から手を出そうとしたい佐藤さんに、私は首をかしげた。

「予備の装備。あるにはあるんだが……」

「シュージュ用。ですか？」

カイの指摘に佐藤さんは苦笑いをして、袋の中身を引っ張り出した。

「ちっさい」

現れた装備

胸当てやら、腰巻やら、兜

は、どれも佐

藤さんサイズの小さなもので、オクトである私には着れそうにないものばかりだった。

「すまないね。オクト君」

「いえ、ありがとうございます」

しゅんと猫耳をたらしめて、申し訳なさ下に謝られると、こっちが申し訳ないことをした気分になってしまう。

「あ、あのっ！　ところでシュージュって何ですか？」

ぷらんぷらんと寂しげに揺れるしっぽを見ていられなくて、発した言葉に、カイと佐藤さんは、信じられないものを見るような目で私を見た。

「あんだ、説明書は……………」

「面倒だったから読んでない」

きつぱりと断言すると、カイは何も言わずに顔に手を当てた。

「いくら説明書を読んでいないからといって、シュージュも知らないとは…………　内容も知らずに、ROを買ったのかい？」

「もともとは弟のものだったんです。彼女ができやがりまして、やる時間がなくなっただけで、3か月分料金を支払っちゃったからって私が」

「なるほど。そういう事か。それでこんな事態になるとは、不運だったね」

私以上に動転して拳動不審だった佐藤さんは、会話を重ねるうちに段々と落ち着きを取り戻していた。

柔らかな物言いといい、優しい笑みといい、大人の男を感じさせる様子に、私は頬を赤らめ……そうになったが、見た目がなにこれ以下略なので、そういう意味では全くときめかない。

見た目って大事。

「あんだ、ヤクシャも何か分かってなかったんだな」

独り言のように呟きながら顔を覆ったまま、ため息をつくカイ。

「うん、てかヤクシャなんて」

「言ったんだ」

言葉知らない。と続ける前に、カイにすぱっと切られてしまった。

「はは。随分と息が合ってるな。二人はいつから一緒に？」

佐藤さんのこの一言をきっかけに、私達はそれぞれ、ここに来た時の状況を話し合うことになった。

その結果知りえた情報は、

カイと佐藤さんは直前まで一緒にプレイしていた事。

カイは私に出会う数時間前にはこの洞窟を彷徨っていたという事（ただ、体感時間なので正確な時間は分からないと言っていた）。

佐藤さんも、私たちと同じく落雷の音と光と共に、ここに飛ばされて、数時間、中層のごくごく狭い 範囲を行ったり来たりしていたという事。

その間に出会ったのは敵ばかりで、他のプレイヤーには出会わなかったという事。（いやいや、でも私達が中層にやって来た時、いきなり攻撃してきましたよね。ひょっとして他のプレイヤーも敵と

間違えて……なんて恐ろしい考えが頭をよぎったが、その可能性については気付かなかった事にした)

前門の虎に後門の虎。二匹の虎徹に挟まれて行われた報告会は、正直、あまり有益なものとはならなかった。

「とりあえず洞窟を出ようと思うんです」

カイの意見に、佐藤さんは頷きかけて、ふと動きをとめた。

「しかし、下層に同じように飛ばされたプレイヤーがいるかもしれない」

確かに、二度ある事は三度ある。というが、三度あることは当然、四度も五度もありそうだもんな。

佐藤さんのように一人でパニックになっているプレイヤーが居るとすれば、早く助けに向かわなければ精神が持たないだろう。

「それは大丈夫です」

カイの言葉に私と佐藤さんは同時に、彼の顔を見た。

「一番奥まで降りましたから。そこでオクトをみつけたんです」

うわお。カイがいなければ一人でパニックになって精神崩壊していたかもしれないプレイヤーは私だったのか。

「最奥まで一人で潜ったのか!？」

佐藤さんは、信じられないと首をふった。

「ええ、それで、アイギスを連発したもので。佐藤さん、リンデンの余分はありませんか？」

「アイギスを？ それは奮発したものだな」

奮発したのは私がいたからなのかな。ところで、

「リンデンって？」

「MPの回復薬だ」

回復薬でちゃんと回復するんだ……と、ゲームであれば当たり前のことに私は感心した。

じゃあ、さっきの毒消しも兎みたいにもしかやもじゃ食べたら毒状態から回復するんだらうか？

「リンデンなら沢山あるよ」

袋の中から青色の液体が入った小瓶を取り出すと、佐藤さんは「カイは相変わらずアイテムを余分に持たないんだね」と笑って渡す。絵の具を溶かしたような鮮やかな液体を躊躇なく飲み干すと、カイは眉を寄せて唇を手の甲で擦った。

うえー、苦そう。

口を歪めて、ごしごしと唇を擦るカイを見ると、それに気付いたカイにふいと顔を背けられる。

「それ、いい味じゃないよな」

くつくつと佐藤さんが笑うと、カイはますます顔を反らせて、しまいにはくるりと後ろを向いてしまった。

薬が苦手なことを恥ずかしく思っているらしい。

長身強面のヤクシャの姿で、そんな反応をされると萌えてしまうじゃないか。

「アイギスは僕が担当するよ。自動MP回復がついてるしね」

「はい、お願いします。前衛は俺が勤めますので」

「じゃあ、私は……………」

「虎徹にへばりついてて」

なんか、段々と容赦がなくなってきてないか？

そもそも佐藤さんには敬語なのに、私にはため口ってどうなのよ。けつと不満を顔にあらわにしていると、佐藤さんはくっくっとして笑って自分の虎徹を指差した。

「じゃあ、オクト君は僕の虎徹に乗るかい。その方がカイも動きやすいだろっ」

「はい！ よろしくお願いします！」

こうして私の騎獣は虎徹一号から、なにこれ以下略の佐藤さんが操る虎徹二号へと変わった。

スットコドッコイ・テキトー

やっぱりこうなりますよねー。

虎徹二号に跨った私は、小さな佐藤さんの後ろに座って、その細い腰に手を回していた。

肩に捕まるうとしたら、「それじゃあ、振り落としそうで僕が怖い」と佐藤さんに窘められて、この格好になった。

バイクのタンデムの要領だが、運転しているのが子供。後ろの彼女（偏見）役がガタイのいい男という、ちぐはぐな光景になっている。

見た目はともかく、アイギスを唱えて、後方から魔法を放つ、佐藤さんの虎徹に乗っているのはとても楽だった。

カイの虎徹に乗っていたときは、敵に遭遇するたびにロデオ状態だったから。

けれど、すっぽりと背中を覆うカイの体がなくなって、なんだか不安な気持ちになるのは、何故なんだろう。と考えて、刷り込みという言葉がぽつと頭に浮かぶ。

自分が生まれたての雛になった気分でもうにも癪だ。

「佐藤さん」

「ん？」

シタツシタツと、馬で言えば並足で虎徹を進ませる佐藤さんに、声をかける。

カイの無愛想な「なに？」と違う、柔らかい、鼻にかかるような返答に、ちよつと感動を覚えた。

「ヤクシャとシュージュの他にどんな種族が選択できるんですか？」
「うーん、まずオクト君のヒューマンだろ。それから、リョース…」

…エルフって言った方がいいのかな。白い肌に尖った耳に美形ばかりの種族だね。あとは、ギガス……ごつい体で接近戦を得意とする種族で色々と耐性も高いし、あまりパーティを組みたくない人にはもってこいなんだけど、グラフィックのせいかこれを使っている人は少ないね」

どうせ操作するなら自分の好みにあう外見がいいもんな。

「以上の三つに、ヤクシャとシュージユを合わせた五種族から選択が可能なんだけど……オクト君、キャラ作成時に、他の種族見なかったんだね……。キャラの外見には結構力が入ってるんだけどな」
「長く続ける予定もなかったので、面倒でつい」

再びぺちよんと垂れた猫耳が私を誘惑……もとい、私に罪悪感を抱かせる。

「へえ、そうなの。俺はてつきり名前といえば『ああああ』な真性の横着タイプかと思ってた。オクトつても今が10月だからだろ」

私達の話しなど聞いていないと思っていたのに、しっかり耳に入っていたらしいカイが、虎徹を横に並べた。

ぐっ、と言葉につまった私に、「凶星」と冷たく言いおいて、再び先導に戻るカイ。

お前さんはそれを言いにはわざわざ並んだんかい！

「違うから！ オクトパスのオクトなの！」

と悔し紛れに、何故か訳の分からない事を叫んでから、はっとして口を押さえる。

「じゃあ、タコって呼ぼうか？」

などという可愛げのない声が、振り向きもしないカイから聞こえた。

「オクトでいい」

くそつ、腹の立つ。佐藤さんの腰に回した手がぶるぶると震えた。そんな私達を見て、佐藤さんはまた、くつくつと笑う。

佐藤さん、ご機嫌なのはいいんですけど、尻尾をぴんとたてるのはやめてー。鼻にあたってむずむずする。

三人が増えてからの道のりは、結構気楽なものだったと思う。

敵はカイと佐藤さんが、危なげなく倒してくれるし。MP自動回復と、所持数MAXまで所持していたらしいリンデンのおかげでアイギスやら何やらの魔法も使い放題だし。

なごやかに会話を（おもに佐藤さんと）しつつ、他のプレイヤーに会うこともないまま、私たちは二度目の境界線の前に来ていた。これを超えれば、上層！ しかも敵もじめじめ系ではなくなるらしい。

逸る心を抑えて、私はしっかと佐藤さんの腰に回す腕に力を込めた。

念のためにと、カイと佐藤さんが、二重にアイギスをはる。

私達は上層へと足を踏み入れた。

嚴重に警戒して突入した上層入り口は、中層へと入ったときのような緊迫した事態には全くなかった。

本当になんのために立っているのか分からない土留めにもならないような、ひび割れた柱の本数が増えて、やっぱり誰が燃料を補充

しているのか不思議で仕方がないランタンが心持豪華になり、ぴちよんぴちよんと絶えず響いていた水音が聞こえなくなったぐらいで、他は何も変化がない。

節約の為にアイギスを解除して、どのくらい進んだらうか。

前方からパタパタと飛来するそれを目にした私は、身をちぢこませて、佐藤さんの背中に無理やり隠れた。

「佐藤さん」

「ん？」

「あれは、なんですか？」

「ストリゴイ・テンソだね」

「……………さっぱり分かりませんが、蝙蝠ですよね」

土壁の奥から姿を現したのは、4〜5匹で固まって飛行する、蝙蝠の群れだった。

上を向いた鼻に、尖った耳に、黒い翼。ごくごく普通の見た目をした蝙蝠である。

但し、サイズが芝犬並み。

確かに、テラテラジメジメ系ではなくなったが、これも嫌だ。

「蝙蝠だねえ。吸血を使ってくるから、噛まれるとHPを持っていかれるよ」

「あんたは一口で致死量になるだろう」

さらっと涼しい顔で恐ろしい事を告げるカイ。

あんなのに噛まれて一口で死なない方がおかしいと思うんだけど。

「佐藤さん」

「ああ、分かってるよ」

促すように名前を呼ばれて佐藤さんは、早速アイギスをはつてくれた。

ばっさばっさと、徒党を組んで飛び回っていたスト……ストリ……ストコ……蝙蝠達は、私達の姿を認めた途端、嬉々として目を輝かせ、わき目もふらずに飛来する。

「紅炎」

ぼつとカイの槍に赤い炎が灯る。

数もあるしスピードもある。カイの槍で対処できるのだろうか。

私はますます小さくなって、佐藤さんに張り付いた。

「レンテ」

錫杖を掲げた佐藤さんの一言で、目にも留まらぬ速さで羽ばたいていた翼の動きが、しっかりと視認出来るようになり　　なんで落ちないの？　なんて突っ込んだら（略）　　目で追うのもやっ
とだった蝙蝠

蝙蝠の動きが、三輪車で全力疾走する幼児程度に遅くなる。

後は簡単だった。

突く突く、斬る雑ぐ、そして突く。

蝙蝠達は炎に包まれ次々と地面に落ちていった。

罪（裸）と罰（ゲット品）

キーキーピーピーと耳をふさぎなくなるような、高音を発しながら息絶えると、白い煙と共に蝙蝠達の骸もまた消えていく。

「おおっ!?!」

と、同時に現れたものに、私は思わず声をあげていた。

金貨でもほうれん草みたいな薬草でもない、一本の傘が、忽然と現れて、土の上に転がっていた。

「おお、すごいなあ。レアアイテムじゃないか」

トテトテと虎徹を寄せた佐藤さんが、飛び降りるようになして着地する。

「種族、職業、レベル、これなら全部関係ないし、オクト君でも装備できるよ」

ぽんつと広げた傘は、真っ黒な洋傘で、

「蝙蝠なだけに蝙蝠傘……………」

開発者の安易な発想に私はふうと息をついて瞑目した。

「どうぞ、オクト君」

失礼ながら、未だに昇り降りが大変なので、虎徹に跨ったまま、傘を受け取る。

傘をさし、虎もどきに乗った、趣味の悪いボクサーパンツ丁の男。

「ぷっ」

「こら！ カイ！！ 今笑ったな？ 笑ったよね！？」

「い……や……気のせいでしょ」

「いや、確かに笑った。てか、肩震えてるじゃん！」

顔を背けて、笑いかみ殺すカイ。

羞恥に顔が真っ赤になった。

「まあまあ、初の装備、おめでとう」

見た目幼女（ひよつとしたら男の子なのかもしれないけど、ちよつと外見だけではわからないから、幼女で）な佐藤さんに窘められると、こんな事で怒っている自分が、ものすごく大人気なく感じる。

そして、そんな佐藤さんの肩もちよつぴり震えていたりするものだから、私は唇を尖らして、

「ありがとうございます」

とお礼を言って、静かに傘を閉じた。

「ところで、これ武器なんですか？ 防具なんですか？」

タッタタッタと軽快に歩む虎徹の上で、私は佐藤さんの錫杖と共に括りつけられた傘を見ながら尋ねた。

これで敵をなくしたら、一撃で壊れそうだけど、センジョ・レク

スの毒攻撃なら防げそうかも。

「うーん、一応武器なんだけどね」

「攻撃力あるんですか？」

「最初に支給されるショートソードと同レベルかな」

レアのくせに、よわっ。

いや、むしろ蝙蝠傘と同レベルなショートソードが弱いのか？

「まあ、ここらの敵には全くきかないかもね。でも、運が飛躍的に上昇するんだよ」

宝箱を開ける前に装備しなおす的武器か。

「魔道士系の女の子キャラだと、好んで装備する人もいるしね」

あー、なるほど。

私は、愚弟、修世のキャラを思い出した。シュウコちゃんにこの傘を持たせたらぴったりかもしれない。

「間違つても、全裸のマツチヨマンが持つ武器じゃないですよねー」
「そんな事ないよ」

肩を落とす私に、佐藤さんは慌ててフォローを入れる。

「パンツははいてるじゃない」

フォローになってなかった。

それにしても、と私はしみじみ自分の姿を見下ろす。

「私が装備できる防具も落としてくれませんかね。この格好で佐藤さんに抱きついてると、犯罪者になった気分になるんですが」

しんと辺りが静まり返る。

あれ？ なにかおかしいことを言ったかなと首を傾げた次の瞬間、ぶはっ

と盛大に佐藤さんが噴出した。

顔を上げれば、くるっと振り返って睨み付けるように目を細め、見てはいけないものを見てしまったというように、さっと顔をそむけるカイ。

佐藤さんの中の人……あれ？ なんがおかしい。

幼女の中の人である佐藤さんは、笑い上戸だったようだ。

ひいひいと苦しげに息を継ぎ、ぽろぽろと涙をこぼして、「腹が、痛い……駄目、腹痛い」と、ひたすら呟いて爆笑していた。

新たに敵が現れて、

「アイ……ブツ、アイギ……ブブ、アイギス！」

なんて噴出しながらようやく唱えられたぐらいだから、佐藤さんの上戸は相当なものだ。

呆れた様に、一人で黙々と槍を振るうカイは、大人びて見えた。

中の人が一番年下のはずなのにね。

マイクを持つ手は小指をたてて

蝙蝠、鼠、蝙蝠、鼠、たまにゴ………Gのつくあれ。

上層に来ようが、この敵はちつとも目に優しくない。

そのほうが、精神的には優しいのかもしれないけど。

「もう半分は進んだかな？」

「どうでしょうね。確か上層が一番長かったはずですけど」

なんて、カイと佐藤さんの会話を聞きながら、虎徹に揺られる。

気付けばいつの間にか洞窟の幅は随分と広くなっていた。

虎徹二頭が横に並んで歩いててもまだおつりがくる。

下層のように岩盤をくり貫いたような形状でもなく、中層のように狭くもなく、ましてやコンクリートが吹き付けてあるわけでもない。正直、敵よりも頭上の土が崩れないか気が気でなかった。

広くなった洞窟内にはもう一つ変化があった。

緑の蔦が、壁を這うようになったのだ。あのー、光合成は………なんて無粋な事を言うつもりはない。

変化に乏しい洞窟内で目にする緑は、何よりの癒しになった。

緑の蔦が生え始めて、十数分。どんどんと葉の量が増え、さらに真っ赤な薔薇のような花がつきはじめた。あのー、受粉は………なんて言い出すのは野暮だと思ってる。

目を楽しませてくれる赤い花に、気分も上がる私とは反対に、何故かカイと佐藤さんは、段々と険しい顔つきになっていった。

「カイ」

「ええ」

とうとう、顔を見合わせて示し合わせるように、こくりと頷きあ

う、カイと佐藤さん。

「どうしたんですか？」

心配になって尋ねると、佐藤さんは困ったように微笑んだ。

「どうやら、僕達は本当についてるみたいだよ」

「モニタの前に座ってゲームをプレイしていたなら、両手を挙げてよろこんだでしょうね」

さっぱり話が見えず、二人の顔を見比べていると、佐藤さんはやつぱり困ったような笑顔を浮かべたまま、口を開いた。

「カウント・ノスフェラトウ。テンソ系の敵が現れる場所に、ごく稀に姿を見せる、テンソ達のいわばドンだね。落とすアイテムは様々だけど、レアものを落とす比率が高く、経験地も大きい。ノスフェラトウを狩ろうと洞窟内をひたすら往復するチームもいるけれど、予期せず遭遇して、全滅させられるパーティもよく目にする」

「レアモンスターでレアアイテムを落とすしてくれて、経験値もがっぽり稼げて、うっはうは。だけど超強いつてことですか」

「稼ぎたい時にはおいしいんだけどなあ」
「今は激まずですね」

目を伏せて、短い腕を組み、うんうんと頷く佐藤さんは、やばいくらい可愛かった。

「で、ノスフェラトウ出現と、この薔薇みたいな花は何か関係が？」

「あ、そうそう。彼のシンボルみたいなものでね、彼が現れるのに先立って、血のように赤い花が咲き乱れる光景に遭遇するんだ」

「てことは、すでにノスフェラトウに出会っちゃうのは決定事項っ

「て事ですか!？」

「そういつことだ。来た」

ええっ、もう!？」

さつと槍を構えるカイに続き、佐藤さんは錫杖とともに、傘を引き抜き、私に手渡してくれる。……ものすごく役に立つ気がしないけど。

「アイギス」

きんと、透明な膜が張られた。

風が吹く。

生暖かい風が、どこか血なまぐさく感じるのは、風に舞った花びらが、鮮血のように赤いからだろうか。

敵の姿はまだ視認できない。

ざらざらとした茶色い土壁、揺らめくランタンの火。

しんと静まり返った洞窟内に、赤い花びらが降り積もっていく。

何かおかしい。

延々と続くかに見える穴が続くその方向に目を凝らす。ふいに、

空間が陽炎のように揺らめいた。

「紅炎」

太ももに止められたベルトから引き抜いたナイフを手に、カイがそう呟くと、ぼつと刃が燃え上がる。

熱そう。と思った時には、ナイフはカイの手を離れ、揺らめきの中へと吸い込まれていった。

ドンッ

そんな音がしたかと思った。
ランタンのほの暗い明かりに包まれていた洞窟が一瞬にして闇に落ちる。

肺に空気を送り込む。呼吸という当たり前の行為さえ、意識してやらなければ滞ってしまいそうな、圧倒的な恐怖がそこに在った。

「ルーチェ」

静かな佐藤さんの声と共に、ぽつとカイと佐藤さんの虎徹に吊るされたランタンに火がついた。

暑くもないのに、汗が幾筋もしたたりおちていく。

カイも佐藤さんも、瞬きさえせずに、ただ前方の一点に目を据えていた。

闇がそこに居た。

漆黒のマントに包まれた体。

長い黒髪。

白い顔はこの世のものとは思えぬ、作り物めいた（……いや、実際に作り物のはずなんだけど）美貌を湛え、今まさに血をすすってきたといわんばかりに赤い唇は、ゆるりと弧を描いている。

自ら首筋を差し出してしまいそうな、神秘的な絶世の美貌の男だった。

なのに、なのに、なに、その化粧！

すつとひかれた黒いアイラインに、青紫のアイシャドウ、細く細く眉えられた眉。

ノスフェラトウの第一印象は恐怖。第二印象は、「一昔前のビジュアル系バンドでマイクを握ってそうな人」だった。

チープなアイシャドウのせいで、濡れたような赤い唇はグロスを塗りすぎたようにしかみえない。

残念すぎる。

バサリッ

ノスフェラトウが片腕を上げてマントを広げた。
途端に湧き出す、テンソの群れ。

キイキイと甲高い泣き声を上げながら、羽ばたく彼らの狙いは、
カイのようだ。

「レンテ」

佐藤さんの唱えた魔法で一気に遅くなったテンソの群れを、カイ
は燃える槍で貫いた。

しかし、最後の一匹を仕留めた頃には、ノスフェラトウによって
新たにテンソが生み出されていた。

レンテが効かないらしいノスフェラトウは、バツサバツサとマン
トを広げ、わっさわっさとテンソを生み出している。

鬱陶しいな、おい。

「カイ、まずはマントだ」

「了解」

くるんと槍をまわして脇に挟むと、カイと佐藤さんは同時に魔法
を唱える態勢に入った。

「シール」

「フランナール！」

「フランナール！」

佐藤さん、カイ、佐藤さんの順に次々に呪文が唱えられた。

説明書も読んでなきゃ、魔法の一つも分からないけれど、恐らく
最初の「シール」でステータス異常を狙ったのだろう。傍目にはま

まったく何も変わらないから想像でしかないけど。続く「フランナール」では、二人の眼前に現れた炎の塊が、徐々に火力を増しながら、山なりになって飛んでいき、ノスフェラウのマントに命中していた。黒煙を上げて燃えるマント。

「フランナール！」

「フランナール！」

立て続けに唱えられる炎の魔法。

けれどノスフェラトウも燃えるマントでまだまだテンソを生み出している。

ビロードのような光沢のあるマントを翻すたびに、炎を掻い潜ってテンソが生まれ、鋭い牙の生えた口を開けて、獲物（つまり私たち）へと襲い掛かるうとしていた。

「レンテ」

びくりと体を堅くして蝙蝠傘をかまえる私の前で、佐藤さんは慌てず騒がずテンソを押さえにかかった。

「フランナール」

「フランナール」

と思っただけ、テンソはレンテをかけただけで放置し、また二人の魔法はノスフェラトウのマントへと集中する。

ばっさばっさ。マントがはためき。キーキー。テンソが生まれる。

「レンテ」

すると佐藤さんがテンソを抑え

「フランナール」
「フランナール」

二人でまたマントへの集中砲火。

ばっさばっさ。キーキー

「レンテ」
「フランナール」
「フランナール」

ばっさばっさ。キーキー

「レンテ」
「フランナール」
「フランナール」

極めると単なる作業になっちゃうといういい見本かもしれない。

フランナールでマントを燃やし、蝙蝠が生み出されれば、すぐさま佐藤さんがレンテ（スピードダウン）を唱え再びフランナールの二重奏。

カイが一回魔法を発動させる間に、佐藤さんは二回魔法を使っていた。詠唱速度アップのスキルなり装備なりがあるのかもしれない。

「獄灼炎」

レンテでは抑えられなくなったテンソが間近に迫ると、ようやくカイは槍を構えた。

フランナールの巻き添えをくって、翼の端を焦がしながら、レン

テの影響でゆっくりと飛翔するテンソを屠るのはカイには簡単な仕事だった。

白刃が一閃した後に転がるのは青い炎に身を包まれたテンソの群れ。

やがてノスフェラトウのマントから、新たに生み出されるテンソはいなくなった。

俺の話聞け！

随分と短くなった、ぷすぷすと燻るマントを肩から外し、ノスフエラトウがいと唇を吊り上げる。

「よくも我が眷属をいたぶってくれたな」

「うおおお！？　しゃべった！」

「うん、ボスレベルの敵はしゃべるんだ」

そっかあ。喋るのか。なんかちよつと嫌だな。人型だし、人語を解されると抵抗がある。

カツン、カツン、といつのまにか手にしていたステッキを打ちつけ、優美な足取りで近づくノスフェラトウ。

「下郎の分際で我を相手にしよ」

「フランナール」

「……うなど。思い上がりも」

「フランナール」

「シール」

「……甚だしい。思い知るがいい！　真の」

「フランナール」

「あ、あのう。佐藤さん？」

私はそつと佐藤さんの袖をひいた。

「ん？」

相変わらず鼻にかかった声は柔らかい。

「口上の間は待つてあげなくていいんですか？」

私は、哀れにも降り注ぐ火の粉に黒髪の端を焦がす、ノスフェラトウを指差して囁いた。「恐怖を知れ！ さあ、人間ども、我にたてついたこと、とくと後悔させてやるぞ！」なんて言葉の合間にも、容赦なく飛び行く火の玉。

「本当は攻撃できないはずなんだけどね。出来たね」

につこりと微笑みながら、フランナールを発動する佐藤さんは、ほんの数時間前の動転して振るえて涙を流していた佐藤さんとは別人のようでした。

「紅炎」

ナイフ3本を片手にとると、カイは炎を灯して虎徹から降りる。ようやく口上を述べ終えたノスフェラトウめがけて、それを投げつけると、すぐさま槍を構えた。

「獄灼炎」

カイの槍を魔法で強化したのは佐藤さんだった。

「はっ！！」

気合の掛け声も勇ましく、一気に地を蹴って距離をつめると、ノスフェラトウの肩をめがけて、槍を振り下ろす。

ザシュッ

布を切りさく音と共に飛び散る鮮血。

ノスフェラトウは攻撃を避けもせず己が身を切らせる。

なんなのこいつ、マゾなの。

「ふ、ふはははは。我が血を見るなど」

「フランナール」

ザクツザクツ

「幾百年ぶりのことであろうか」

「フランナール」

ザクツザクツ

「どうやら「攻撃を受ける」をトリガーとする台詞があったらしい。容赦なく放たれる魔法に焼かれ、カイの槍にサクサク刺されながら、ノスフェラトウはまだ頑張っていた。

「この代償は、高くつく。死すら生ぬるい絶望を味わわせてやろう」！

全ての台詞を述べ終える頃には、ノスフェラトウは満身創痍になっていた。

焼けて縮れた髪。煤だらけの顔。びりびりどろどろの服。もう、ビジュアル系バンドは解散だ。

止めとばかりに、カイの槍がその胸を貫いたときだった。

唇の端から紫色の血を滴らせながら、ノスフェラトウは不敵に笑う。

「レスタウロ」

形の良い唇が静かに動いて言葉をつむぐ。

「くそっ」

佐藤さんが、悔しげに悪態をつくその前で、そろそろ見ているのも可愛そうになほどにポロポロの容姿が、見る間に修復されていく。

「佐藤さん、今の呪文って……………」

「全回復…………だよ」

テンソを生み出す以外の、己の初のターンが回復呪文というものも切ない。

にしても、全回復とは。

私にはRPGをプレイするにあたって、許せない敵が二種類いる。ひたすら仲間を呼んで増殖する敵と、自己回復しちゃう敵だ。

両方の要素を併せ持つなんて、

「くそ鬱陶しいですね」

「そう、これだからこいつ嫌いなんだよ。魔道騎士と、魔道士じゃ、ちよつと決定打に欠けるかな」

ムキムキマッチョな戦士系が足りないのか。見かけだけはマッチョなのに、お役に立てなくてごめんなさい。

「佐藤さん、あいつのHPが残り少なくなったら、また獄灼炎かけてもらえますか」

素早く後退したカイが佐藤さんに耳打ちする。

「いいけど、どうする気だ？」

「ボランヴェルを使います」

カイの答えに佐藤さんは息をのんだ。

「駄目だ」

強い声できつぱりと突っぱねる佐藤さん。だがカイは譲らなかつた。

「ボランヴールを使えば俺のHPは10%まで減ります。HPが残り500を切れれば、窮鼠が発動して攻撃力がUPしますから、それを狙います」

相談でもなければ、提案でもない。カイの中では既に決定した事項なのだと、その強い眼差しが語っている。

佐藤さんはため息をついた。

「君は本当に頑固だな」

カイを見詰める佐藤さんの目は心配でたまらないというように潤み始めていた。

「2打だ。2打打ち込んだらすぐに下がって、回復すること。いいね?」

「……………はい」

ほんの少し迷ったように目を伏せてから、カイはすつと顔をあげると、佐藤さんの目を見て頷いた。

二人の話と涙ちよちよぎれる友情についていけない、私……………とノスフェラトゥ。

ちなみに、二人の間で熱いドラマが繰り広げられているこの間、

私は虎徹の上で、ぶんぶんと蝙蝠傘を振り回して、どうにか役に立
てないものかと思案しており、ノスフェラトゥはレスタウロ詠唱を
トリガーとした長台詞を一人でぺらぺらとまくし立てていた。

可哀想すぎるぞ。ノスフェラトゥ。

ヒロインは佐藤さん？

俺は何度でも復活しちゃうんだぜ。参ったか虫けらども！

要約するとそんな感じの台詞を喋り終わると、ノスフェラトウはステッキで宙に円を描いた。

その円状にいくつもの小さな炎がボボボボッと灯る。

「嘆きなさい！」

いまいちよく分からないきめ台詞と共に、炎は蛇のように一列になって飛翔した。

狙いは、佐藤さん！？

危ないっ！と叫ぶ前に炎の蛇はアイギスにぶちあたり……………霧散した。

すごいのは名前だけじゃなかったんだ。アイギス様様！

ほっと胸をなでおろしたのも束の間、ぱりぱりっと卵の殻がひび割れるような嫌な音がきこえた。

ぱきんっ。

一際高い音をたてると、アイギスもまたきらきらと光の余韻を残して消え去る。

「シール」

ええええええ。アイギス消えちゃったのに、先にそっち！？

「アイギス」

「アイギス」

ひいいと、蝙蝠傘を握り締めて顔を青くしていると、カイと佐藤さんが二重にアイギスを張ってくれる。

それからまた、フランナールの大合唱だった。

ノスフェラトゥが攻撃をしかけるたびに、「あっ」「ひゃあ」「あぶなっ」「ぎゃ」と虎徹の上で悲鳴を上げ続けることしばし。

「佐藤さん、いきますー！」

「ああ」

振り下ろされるステッキの合間を掻い潜ってカイが懐にもぐりこむ。

「ボランヴェール！」

それは詠唱というよりは絶叫に近かった。

まず爪の先が真っ黒に染まった。かと思うと、そこから鳶のようなものが這い出て、見る間にカイの手を侵食していく。

「ぐっう、うああああ」

苦しげな声が噛み締められたカイの唇から漏れた。

鳶はあっというまに顔にも現れた。鎧に覆われて見えないが、恐らく体中に鳶が張り付いているのだろう。

「ぐっ」

はっ、はっ、はっ

くぐもったうめき声。

カイの息遣いは荒く乱れ、とうとう眼球にまで黒い鳶がはったと

き、オオオオオンと鐘をついた後の余韻に似た響きがカイの体から発せられる。

頭の芯を震わせる振動に、両手で耳をふさいだ。その反動でぶれた視線を、再びカイに戻したときには、黒い蔭はきれいさっぱりカイの体から消え去っていた。

もはや声も出ないと言った様子のカイ。固まったように腕を突き出し、短い呼吸を繰り返している。

その、震える指先から、しゅるしゅると黒い糸が渦巻き、湧き出で、次々とノスフェラトウの体に這いだした。

ボランヴールとは使用者のHPを犠牲に相手にダメージを与える技。のようだ。二人の会話から何となく想像はついていたが、こんなに痛そうだななんて思わなかった。

「獄灼炎」

固い声音で佐藤さんが呟く。

地面と水平に、両の親指と人差し指の間に挟むようにして持っていた槍に、ぼつと青い炎がともった。

2 撃

佐藤さんとの約束だ。

だが、カイはノスフェラトウへと攻撃を繰り返す前に、太もものベルトからナイフを抜き出すと、それを鎧の継ぎ目を狙って、己の足へと突きたてた。

「うっあああ」

聞いていられない。カイの悲痛な叫びに胸がぎゅっつと締め付けられた。

ボランヴールだけではカイの狙う効果は得られなかったらしい。さらにHPを削るために自分で自分を傷つけたのだ。

私には理解できない胆力だ。

捨て身のカイの行動。

けれど、この間が命取りだった。

カイが痛みに耐えて、槍を構えようとした時、ノスフェラトウの唇がにいとつり上がる、

「レス」

「させるかああああああ!!」

ノスフェラトウが全回復魔法を唱えようとしている。カイの攻撃は間に合わない!

そう分かった瞬間、私は手にしていたものを渾身の力でもって投げつけた。

ビュオオオンと風を切つて、恐るべき速さで飛んでいく

蝙蝠傘。

仁木 杏の体なら、届くかどうかも怪しかっただろうそれは、オクトのムキムキ筋肉の力を得て、一直線にノスフェラトウの元へ飛んでいき、ビイインと音をたてて、彼のこめかみに命中した。

すげーよ、マッチョマン!

槍投げに出場したら間違はなくワールドレコードを更新できると思う。

ほんのちよっぴりめり込んだらしい蝙蝠傘は、しかしというか、やはりというか、殺傷力は無いに等しいものだったらしい。

ノスフェラトウは忌々しげに傘を叩き落とすと、ギョロリと赤く光る瞳を傘の出处……私に向ける。

わーあ、ロックオンされた。

と思つたら、私なんて存在しないかのように、その目は私の上を滑り、佐藤さんを見据える。

「お前など相手にするのも馬鹿馬鹿しいわ」そう言われた気がした。へこむわー。

佐藤さんを睨んで、杖を掲げるノスフェラトウ。
だが、もう遅い。

「お前の相手は俺だ！」

体勢を立て直し、しっかりと握り締められたカイの槍がノスフェラトウを貫いた。

「ガハッ」

血を吐いて、信じられないというように首をふるノスフェラトウ。カイは血まみれになった槍を、力任せに引き抜き、倒れこむようにして、再度、ノスフェラトウへと突き刺した。

仰向けに倒れたノスフェラトウの口内から、ごぼりと塊となつて零れ出る紫の血。どくんどくと心臓が脈打つたびに、おびただしい量の血が流れていく。

やった………のだろうか？

「レスタウロ！」

結果が出る前に、佐藤さんが回復魔法を唱えた。

ノスフェラトウの上に倒れたカイの体が癒されていく。

待ちきれなかったのだろう。

あんなに接近して、ノスフェラトウの鋭い爪で裂かれれば、極限までHPを削ったカイなど一撃で昇天だ。

私は滑り落ちるようにして虎徹から降りると、カイに駆け寄ってその体を引き起こした。

重い鎧を着込んだ大きなカイの体を、オクトの体は簡単に持ち上げる。

脇の下に腕を入れ、胸の前でがっちり両の手を組むと、カイの

足をずるずると引きずって、その場を離れた。

カイを抱き起こす際に見えたノスフェラトウの目には、僅かに光が残っていた。今にも消えようとしていた微かな光が……………。

「フランナール」

駄目押しの一撃が佐藤さんから放たれる。

「ぐっぐうと燃える炎につつまれて、白い煙と化していくノスフェラトウ。」

彼の体と流れ出た血が、すべて煙に変わって消える頃になって、私はがくんとその場に膝をついた。

「重い」

「あつ、ごめん」

引きずってきたカイの背中に体重をかけてしまった事に気付いて、すぐさま体を起こした。

「カイ……………」

搾り出したような擦れた声が喉から漏れた。

「なに。なんて声だしてるの……………もう回復した　さっきは、助かった」

鎧についた土を払いながら立ち上がるうとしたカイの肩に、手をのせて、ぐっと抑えこむ。
まさか、そんな事をされるとは思っていなかったのだろう。バランスを崩したカイが尻餅をついた。

「何するんだよっ!」

「座ってて」

「何で?」

「とにかく座ってて!」

不服そうな顔をしながらも、カイは素直に片足の膝を立てて座り込む。

確かに体はレスタウロで回復したかもしれない。

けれど強烈な痛みを味わったばかりの心はどうだというのだ。

作り物のヤクシャの体に与えられた痛みは、生身のカイの心を蝕んだはずだ。

私はカイの背中にそっと額をついた。

悔しい。何の役にも立てないことが。歯がゆくて、情けなくて、たまらなかった。

何故、オクトを作ってしまったのか。シユウコちゃんできていたら、きつとカイはこんな戦い方をせずすんだだろうに。

「じゅめん」

小さく零された言葉。

「なんで、カイがあやまんの」

「じつんと、額を背に打ち付けた。

「いつて」

役に立てないばかりか気まで使われて、こんなに惨めな事は無い。ヒリヒリと痛むおでこをぐりぐりとカイの鎧に擦り付ける。

「あんななあ……………」

呆れたようなカイの声。

カポカポと足音を立てて近づくと小さな人影に、私は顔を上げる。
同時にカイも前を向いて

「え」

「あ」

二人で固まった。

「カイ。ボランヴールは二度と使わないでくれ。頼む」

幼児並みの小さな体を震わし、ぷにぷにの頬を大粒の涙でぬらしながら、震える声で懇願する佐藤さんがいた。

「カイ。カイ。君に何かあったら、僕は……………僕は……………」

えぐえぐとしゃくりあげて、ぎゅつと目を瞑る佐藤さん。

閉じられた瞼からも、止まる事を知らぬ涙が、行く筋も流れて、
ぼたぼたと服に染み込んでいく。

なに、この……………可愛い生物は。

いや、もう、反則でしょう。その容姿は……！！

変態紳士誕生

「すつ、すみません。佐藤さん！あの、もう使わない……………ようにしますから。ほら、見ての通り、もう体もなんともないですし、痛みもないですから、だから……………泣き止んでもらえませんか？」
「そつそうそう、もうノスフェラトウは倒したし、洞窟でるだけだし、使わないですよ。ほ、ほらほら、もう泣かないでー。よしよし、いい子だねー」

わたわたと駆け寄り、身振り手振りで説明するカイと、サラサラの髪に覆われた頭を撫でる私。

ほろほろと涙を零しながら、佐藤さんは、むつと眉を寄せた。

「なぜ、子供扱いなんだ。僕は本気でっ！」

怒りかけた佐藤さんは、またさっきの光景を思い出してしまったのか、うつうつとしゃくりあげ始めた。

髪が濡れた頬にはりついて、ベトベトのぐしゃぐしゃになった顔を、ごしごしと掌でぬぐう姿は、まさに胸キュンもの。

ぎゅうぎゅうに抱きしめて、ほお擦りして、撫で回したいけど、中身は佐藤さんだ。

ごくりと唾を飲み込んで耐える私の横で、カイは困ったように頬をかいていた。

「あっ」

ふいに、頬をかく手を止めてカイが声をあげる。

「んっ？」

泣いているせいで、何割り増しかで鼻にかかった声で反応する佐藤さん。

もう中身が佐藤さんでもいい気がしてきた。

「俺達、本当についてるかもしれないよ」

カイの視線の先は、丁度ノスエフェラトウが消えた辺りで……

「何か、落ちてる」

血の染みも何もかも消えたそこには、お馴染みの金貨と、黒い物体が二つ落ちていた。

「これは、すごいな……」

佐藤さんが呆然とした声をだして歩み寄る。

「レアものですか？」

私が装備できる防具だと嬉しいけど、傘を投げただけなのにそんな主張はちょっとしにくい。

佐藤さんに遅れて続けば、一足先に物体Xまでたどり着いた佐藤さんが、それを手にとって、満面の笑みで振り返った。

「オクト君！ 君でも装備できるレア防具が2点も手に入ったよ！」

実のところ、役に立っていないくとも、装備が手に入ったら、佐藤さんはそう言ってくれると思っていた。

だから「本当ですか！？ 嬉しい、ありがとうございます！」「っ

て言おうと待ち構えてた。

けれど、佐藤さんが手にしたそれを見て、私は

「え」

と声を出して、立ち止まってしまった。

「すごいですね。レアが一度に2点も」

感心したように、それに見入るカイ。

「ほら、オクト君。つけてつけて」

「え、いや……でも」

涙の跡もそのままに、佐藤さんは笑顔でそれを差し出した。

「なに、つけないの？」

そう聞くカイの声はいつもどおりの平坦なものだったけど、口元が意地悪く歪んでいる。

「ほらほら、遠慮しないで」

対して佐藤さんは一分の曇りもない笑みだ。この人、天然なのか。

「や、でも……えーと」

「俺がボランブールまでやって得た報酬……なんだけど？」

うつ、卑怯な。それを言われてしまっはつけないわけにはいかないじゃないか。

「うっさいな。つけばいいんでしょ！」

私は腹をくくると、きよとんとした顔で首を傾げている佐藤さんの手から、それを受け取った。

「恥ずかしいから、向こうをむいててもらえますか？」

頬が熱い。きっと真っ赤になっているだろう。

熱を持った頬に手を当てて、小さな声で懇願すると、何故か二人は、「うっ」「とうめき声をもらし、青い顔をして、くるりと体を反転させる。

(中身は)ぴちぴちの女子高生を前になんて失礼な反応なんだ。背を向けた彼らの後ろで、つるつるとした手触りのそれらを身につけると、私は消え入りそうな声で告げた。

「もう、いいですよ」

との言葉に振り向いた二人は、

「あ」

「ぶっ、あっははははは。最高！」

それぞれ違った反応を見せた。

佐藤さんは、ぼかんと口を開けたあと、さっと目をそらし、カいは腹を抱えて大爆笑。

私はぎゅっと手を握り締めて羞恥に耐えた。

これは、カイが命がけで手にしてくれた大事な報酬なのだ。

「いいじゃん、似合ってるよ」

ひいひいと体を折り曲げて笑うカイ。
多少の辱めは耐えな……ければ……。

「あー、もう。頑張つて倒したかいたよ。ねえ、佐藤さん」

ぐつと唇を噛み締めて眉根を寄せた佐藤さんの肩は、もちろん小刻みに揺れている。

「うるさいわ！ やっぱりカイがつけなさいよ！」

「それ、ヒューマン用だから、俺は無理」

確かに、角が生えているカイにこれは装備できない。

ぐつ、と言葉につまった私は、身につけた、それら

『シルクハット』をぎゅつと掴んで、無理やり目深に被り、首元を飾るシルク地の『蝶ネクタイ』を手の中に握り込んで隠した。

「佐藤さん、笑いたければ笑っていただいてかまいませんが」

ぷるぷると肩を震わせて、息を止めている佐藤さんの顔は、赤を通り越して紫に変色している。

「やつ、そんな……笑う、だな……んてっ……ごめん、オクト……
ぷっ……君。も、無理っ！！」

このあと佐藤さんの笑いの嵐が収まるまで、その場で長い長い休息を取ることになったのはいうまでもない。

ただ今の装備、趣味の悪いボクサーパンツ、蝙蝠傘、シルクハット、蝶ネクタイ。

.....
もしやだ。

ラッキーボーイ、アンラッキーリトルガール？

惜しげもなくさらされた厚い胸板。ぽこぽこと綺麗に別れた腹筋の下はぴっちりパンツに覆われ、太い首には光沢のある黒の蝶ネクタイがつるりとした光をはなっている。

頭を覆うのは紳士の必需品シルクハット。そして手には雨には無縁の地下だというのに蝙蝠傘。

紳士というより、変態だ。

虎徹のふわふわの鬘に体を押し付けて、身を隠すようにしてやさぐれていると、すっと誰かが背後に立った。

「佐藤さんがおさまったみたいだ。いこうか」

最初に遠慮なく爆笑したカイは、もうとっくに見慣れたのか、はたまた飽きたのか、変態街道一直線の私の格好を見ても、最早眉一つ動かさない。

「佐藤さん、いきましようか」

「あ、ああ。ごめんね、オクト君……ぷっ……お待たせ……ぐっ………しました」

本当におさまったのか！？

「ところで、このシルクハットと蝶ネクタイ。防御力ほどのくらいなんですか？ 何か特殊な効果でも？」

虎徹の背中が上がると、ぴくっぴくっとしつこく肩を震わせる佐藤さんに尋ねる。

「んー。蝶ネクタイはアクセサリーだから防御力はないね。シルクハットの防御力は皮の帽子くらいかな？」

「皮……………それってショートソードと同じく初期装備の……………ですか？」

「そうそう」

レアのくせにまったく高くないし！

「それで、特殊効果は？ ……まさか鳩が出せる。とか言わないで下さいよ」

だったら今すぐ脱いでやる。

「鳩かあ。それもおもしろそうだなあ……………あつ、だめ、くっぷっぷぷっ」

しまった。また佐藤さんの笑いのツボを刺激してしまった。

「シルクハットは運がプラス100、蝶ネクタイはプラス85だ」

すでに会話にならない佐藤さんに代わって、カイが教えてくれる。

「へー、運が……………確か蝙蝠傘もだったよね……………」

「蝙蝠傘はプラス95。ヒューマン男の初期値が8で、あんたの運は今、288ってことになる」

「おおー、すごいラッキー……………って、運だけかよ！」

やっぱり脱ごうかな。

「いやいや、運は重要だよ。オクト君」

蝶ネクタイに指をひっかけて見下ろしながら、本気で装備を外そうか迷っていると、早々に復活した佐藤さんが生真面目な声をだした。

「僕なんて、MP自動回復のサークレットで運がマイナス35、魔力UPの錫杖でマイナス10、魔法耐性UPの胸当てがマイナス14、素早さUPの靴でマイナス13……運は2しかない」

なんつー、アンラッキー幼女。その装備、呪われてるんじゃないの？

「おかげで、碌なアイテムは落としてくれないし、宝箱を開けたら毒トラップだし。一番困るのがあれかな。さすらいの道具家ローレン！」

佐藤さんが口調を強めると、カイが「ああ」と思い出したように頷いた。

「ローレンはマップを移動しながら商いをする移動商でね、街にある店には扱っていない品を売ってるんだけど、出会ったたびに売価が違うんだ。それが毎回ありえないほど高額でさ」

「そっぴや、前回ローレンに会った時に、俺が320ゼルギーで買えたリンデルが、3800ゼルギーだったって言ってましたよね」

なにその暴利。ローレンうはうはじゃん。

「そこまでして、その装備にこだわる理由ってなんですか？」

そりゃ、MP自動回復も、魔力UPも、魔法耐性UPも素早さU

Pも、重要だろうけどさ、もっとこう、呪われてない系のものはなかったのだろうか。

「そりゃあ、もちろん!」

佐藤さんは、ふんと鼻息を荒くした。

「可愛いからだよ!」

ああー、言っちゃったよ。この人。

確かに、佐藤さんの格好はかわいい。上から下まで同系統の鎧で固めた面白みの無いカイと違って、色々な種類のものを可愛く見えるように組み合わせたって感じた。

頭にはピンクゴールドのサークレットをカチューシャのようにはめ、パフスリーブの白いチュニツクの上には、縁をボアで飾られた胸当て、スコットランドの民族衣装を彷彿とさせるチェック柄の巻きスカートに、短い脚にはもこもこのブーツ。

「佐藤さん……もしかして、その姿になっただって気付いたとき、服の中を見たりしました?」

「え? 見てないけど、どうして?」

その「え?」が、いかにもきよどつてますって「え?」だったら、佐藤さんはクロだと、そう私の中で確定されたけれど、佐藤さんの「え?」は、どうしてそんな事聞くの? って「え?」だった。

「そんな事するのは、あんたぐらいだよ」

呆れたようなカイの声。

うあっ、ブーメランきた。

「記憶にございません」

私はすつとそっぽを向いて惚けた。

「ん？ オクト君は服の中を見たの？ それはまたどうして？」

佐藤さんのピュアさが眩しい。

心底分らないといったふうの佐藤さんに、カイがため息をついて口を開いた。

「そりゃあ……」

「元の体と作りが違つと、いろいろと不都合があるかもしれないから、確認しとこうと思つてです！」

私は一気にまくし立てて、きつとカイを睨みつけた。

余計な事を言うんじゃないかねえや！

「体のつくりが？ ヒューマンなのにな？」

と、首をかしげてから、佐藤さんはすごい勢いで振り返つた。

「オクト君……ひょっとして、ユーザーさん、女の子？」

「……そうです」

「え〜〜〜〜〜！？」

佐藤さんの絶叫が洞窟内に響き渡る。

えっ、そうなんだ。女の子かあ。あ、ごめん、間違えてて。いや、こんなおじさんと相乗りするの嫌じゃない？ そうかあー、女の子

か。うわ、どうしよう。僕なんか失礼な事しなかった？ その、体とか見てごめん。あー、でもその体は本当の体じゃないわけだし。あ、でも、それでも女の子だったら恥ずかしいものかなあ。ごめん、服もってなくて……。あの、本当に僕と相乗りするの嫌じゃない？

などなどなど、佐藤さんのてんぱり具合は凄まじく、彼が常日頃女つ気のない生活を送っているのだらうと、その様が変わりたまざまざと想像できた。

「そうかあ、性別が変わっちゃったのか。それは大変だな」

と、最後に佐藤さんはしみじみと呟いた。

「性別変わっちゃったのは、佐藤さんもじゃないですか？」

尋ねれば佐藤さんは首を傾けた。

「ん？ シュージュに性別はないよ？」

「はい？」

私は今、何か、おかしい言葉を聞いた。

目を丸くして佐藤さんを凝視していると、くるつと振り向いた佐藤さんが、己を指差して言う。

「雌雄同体なんだよ。シュージュは。繁殖の季節だけ、男と女に分かれるって設定でね」

「マジですか」

「マジです」

はああ、確かに見た目だけではどちらか分からなかったけど、本当にどちらでもないなんて。まあ、何にしろ佐藤さんの可愛さは変わらないわけだけど。

………しっかし、誰が得するんだ。その設定。

その名はG

「ランタン増えましたね」

淡いランタンの明かりに照らされた土壁の色が、茶色から黄土色へと変化した。

最初、私はそれを土質が変わったからと思っていたのだが、そうじゃなかった。

狭い間隔で置かれたランタンに洞窟全体が明るく照らされるようになってきている。

「ああ、出口が近いのかもしれない」

「やっと……ですね」

早く外の空気が吸いたい。

外にはどんな世界が広がっているのだろうか？ 考えてみれば、洞窟以外のROの世界をまったく知らない。洞窟の外も、このこと同じように、ゲームの設定通りの世界なのだろうか？

だとしたら、外にも当然敵がいるだろう。

洞窟を抜けたらそこはベッドの上だった。って夢落ち展開を切実に希望する。

ふいに、顎の下で佐藤さんの猫耳がぴこぴこ動いた。

わ、驚づかみにしたい。

私の忍耐の限界に挑戦しているとしたか思えない行動に、鼻息を荒くしていると、佐藤さんが叫んだ。

「声がするー！」

「本当ですか!?!」

ぱつとカイが振り向いた。

「またノスフェラトウですかあ……………」

がくつと私はうな垂れた。

もう、シルクハットは間に合ってます。

「違う、ノスフェラトウじゃない……………ユーザーだ！ 急げ、カイ」

言うなり、佐藤さんは虎徹の腹を目いっぱい踵で打ち付けた。

だんっ

つい今しがたまで、のっそのっそと体を揺らしながら歩いていた虎徹は、驚異的な跳躍力で駆け始めた。

「うっえっ……………ちよっ……………まっ」

佐藤さん、走らせる時は一声かけてからにしてほしいです。

がつくんがつくと頭を揺らしながら、後ろにもっていかれそうになる体をなんとか引き戻す。

ぎゅつと佐藤さんのぽよんぽよんのお腹に（たまらん！）しがみついて体勢を低く保った。

「いたっ！ あそこだ！」

吹き付ける風に目を眇めて俯いていた私は、佐藤さんの声に、顔を上げる。

そして、まだまだ遠いその先にある光景に息をのんだ。

（多分）人だ。（恐らく）人が海亀サイズのゴキ……………Gのつくモンスターに襲われている。

なぜ、多分や恐らく、がつくのかというと、別に角が生えているわ

けでも羽が生えているわけでもなくて、青かったのだ。
髪が。

そりゃあもう、目も眩むようなスカイブルーだった。
髪色はある程度自由に調整できたから、どんな色にも設定できたはずだし、カイの髪も暗赤色だ。もちろん青でも不思議ではない。ないはずなんだけど、ああまで鮮やかな色を実際にこうして生で目にする、違和感のはんばない。

これだけ遠目でも、宴会用のカツラにしか見えないなんて、近くでみたらどう感じるだろう。

カイと佐藤さんが必死に虎徹を駆る間にも、青髪の方は、じわじわと壁際に追い詰められていた。

長い髪を振り乱し、両方の手に持った二振りの刀で必死に応戦しているものの、数で勝るG相手に苦戦しているようだ。

うごごごと、うごめく黒い群れ。

長い触角が秋風に吹かれるコスモスのごとく、ゆらゆらと揺れて…… 例え一匹でも精神的に惨敗しそうな相手だ。

足元に迫り来るGを左手に持った刀で上から突き刺す青い人。

と、同時に右手から迫るGを右の刀で切り払う。

その時だった。

「ぎえっ！」

私は思わず叫んでいた。

群れの後方にいたGが一匹 飛びやがったのだ。

ぎいぎいぎいあああああ。きもいきもいきもい。

そうだ、奴らは飛びながら始末が悪いんだ。

黒い前翅の下から飛び出た茶色く薄い後翅を、猛スピードで動かして飛翔するG。

青い人は左手に持った、先ほどGの上につきたてたばかりの刀を抜いて応戦しようとするが、地面にまで貫通してしまっているのか、

刀を抜くのに手間取った。迫るG。とつさに右手の刀を突き出す青い人。

勢いのついたGは、自ら刀へと突っ込み……空中で串刺しになった。

それでも致命傷には至らなかったらしい、Gは刀にささったまま、わさわさと足を蠢かし続ける。

ひいひいひいひい。きもすぎるうつつうつつ。

佐藤さんにしがみ付いている為に自由にならない両手の代わりに私は思い切り佐藤さんの頭に顔を擦りつけた。ああ、なんかもう、全身がぞわぞわする。

「うひゃっ、ちょちょちよっと、オクト君。やめっ」

状況も忘れて、あー、ふわふわ。と猫耳に癒されかけたとき、ガツンと後頭部を何かに打ち付けられた。

「いつっ」

振り向けば槍を逆手に構えたカイの姿が目に入る。このやろっ。柄でつついたな。

「何やってるの」

カイの瞳は真冬のカキ氷のように冷たい。

「だだだだ、だって、飛んだんだよ！ あれが！」

乙女の大敵が！

「あれは、角の無いカブト虫！ そう思って」

カイの非情な言葉が胸に突き刺さる。

角の無いカブト虫。角の無い、カブト……………虫……………角の……………ない……………いやああああ。無理！　つか、次からカブト虫を見たらGを連想しちゃうじゃないか。

夏場のホームセンターに行けなくなったらどうしてくれる。

「もしくは、ちょっと頑丈なコオロギ。分かった？」

ぎゃああああ、もう、もう、秋の草むらにもいけない。

広がるGの脅威に、私は佐藤さんの頭に突っ伏した。

「わわっ、オクト君。そこは駄目だって。ひゃっ」

「はーふわふわー。っつ、いたたっ。」

「……………アイギス」

懲りずに佐藤さんに顔を擦り付ける私の頭を、ガスガスと槍の石突で小突きながら、アイギスを唱えるカイ。

きんつと音を立ててシールドがはられたのは、私達ではなくて、青い人の周囲だった。

落ちてるのか飛んでるのか善なのか悪なのか

「紅炎」

手綱から手を放したカイが、ナイフを抜き取る。

お馴染みの炎で強化されたそれは、カイの手を離れ、串刺しになった。また、じたばたともがいていたGへと命中した。

キキイ

物悲しい泣き声を上げて煙と化すG。

そのまま虎徹で駆け、群れの近くまで寄ったカイは、鞍に片手をついて飛び降りた。

槍を引き抜くと共に、ざっと土ぼこりを上げて体を半回転させ、Gに向き直る。

「レンテ」

私の耳すりすり攻撃に慣れた佐藤さんが、スピードダウンの魔法を唱えた。

途端にウゴウゴウゴウゴウゴウゴと高速で蠢いていたG達が、ウ…ゴ…ウ…ゴ…ウ…ゴ…とスローリイに蠢きます。

それはそれで、きもいんですけど！

「紅炎」

今度は槍にかけられたカイの炎。

燃え盛る炎の槍で次々とGを仕留めていく。

そんなカイの姿を呆然と眺めていた青い人は、ふっと我に返ったように前を向くと、未だに地面に突き刺さったままだった、左手の刀を抜いた。

「雷電」

低い声で囁くように唱えられた呪文。

バチバチバチツと音を立てて、灯っては消える光が、刀身に絡みつくように現れる。

初めて目にする雷系の呪文だった。

バシツ、バチバチツ。

Gに刀を打ち付けるたびに派手に飛ぶ火花と音。

やかましいな。雷電。

髪色といい術といい、色々と派手な人だ。

「キール」

なにそれ、シールの進化系？

これまたはじめて聞く呪文が佐藤さんの口から発せられた。

恐らく敵のステータスに介入するのだろう魔法は、やはり見た目には変化がないので、私にはその効果がさっぱり分からない。

けれど、カイや青い人が刃を振り下ろして、引き抜くまでの動作が心持速く軽くなった気がするから、さしずめ防御力なり硬度なり
のダウンといったところだろうか。まあ、あくまで想像だけ。

カイと佐藤さんが加勢し、形勢が引っくり返った後はGを殲滅するの
に、それほど時間はかからなかった。

全てのGが消え去ると、現れる大量の硬貨（でも全部銀貨だし小
さめだから金額はそれ程でもないだろう）とほうれん草にしか見え
ない薬草の束。

ふうつと、息をついたカイが槍をふんとふって、とんと石突で地
面を打った。

その音を合図に、ずっと刀をかまえていた青い人も、ゆるゆると
腕を両脇に下ろす。

もう呼吸の整っているカイとは対照的に、青い人は、肩を上下させて、はあはあと荒い息を繰り返していた。

「……………」

私に出会ったときと同じように、カイは青い人を見つめたまま、言葉を発しようとはしない。

「オクト君。僕たちも降りようか」

佐藤さんの猫耳と猫耳の間に顎を置いて、頬にあたる柔らかな感触にすっかりくつろいでいた私は、困ったようなその声に、はっとして、体を離れた。

とつとつ誘惑に負けてしまった。

いくら猫耳幼女でも、中身は佐藤さん。中身は佐藤さん。と繰り返し己に言い聞かせるが、正直またやらかすだろうという自信があった。

佐藤さんが虎徹を降りるのを待って、私も地へ足をつける。

カポカポと足音を鳴らして、カイの隣に立つと、佐藤さんは無言で青い人の頭上を見詰める。

「……………えーと、fallen angel SEIMA KYO

……………さん？」

「へ？」

私は間の抜けた声を上げて、佐藤さんを見下ろす。

「……………はい」

次に聞こえた低い声に、ぱっと顔をあげれば、青い人は顔を真っ

赤に染めて、恥ずかしげに目を伏せていた。

「……フォールンエンジェル」

なんだ、そりゃ？ と呟いて首を捻ると、青い人は私に目を向けて、一瞬ぎよっとしてから（……………くそっ）さっと目を反らして、ますます顔を赤らめる。

「言わないでくれ。痛いってのは自分でも分かってるから」

かすれた声で、青い人はそう言って、刀を持ったままの右手で顔を覆った。

命名、伊達

「えっと、お知り合い。ですか？」

カイと佐藤さんみたいに、直前までパーティを組んでいたとか？

「ん？ 違うよ？」

ぴったんぴたん、としっぱで自分の背中を打ちながら、佐藤さんは何やら難しそうに顔をしかめている。

「フォールンエンジェルなんとやらって、この青い人の名前ですよね？」

名前を知っているなら、それを知り合いと言わずして何とということなのか。

「あんだ、見えてないのか……」

「は？ なにが？」

怪訝なカイの声。

問い返しても返ってこない答えに、ふと皆の顔を見回せば、佐藤さんも青い人も眉根を寄せて私を見ていた。
な、なんなんだ。いったい。

「これ。本当に見えてないの？」

と言ってカイが指差すのは己の頭上。

長身のヤクシャのその頭の上には、何も無い洞窟の空間が広がる

ばかりで、さっぱり意味がわからない。

「虫でもたかってるの?」

夕方になるとどこからとも無く出てきて、頭上をぶんぶん飛び回るユスリカみたいなものでもいるのだろうか、伸びをしてカイの頭の覗き込もうとすると、わしっと大きな手が伸びてきて額を覆うように押さえられる。

「虫じゃない」

はあーとカイは深いため息を落とした。

「名前だよ。オクト君」

名前が何か? と首を捻る私に、佐藤さんは眉間に皺を刻みながらも、柔らかい声で続けた。

「カイの頭上にはK A I。僕の頭上にはs a l t。それから、かれはf a l l e n a n g e l S E I M A K Y O。それぞれのユーザーネームが表示されているんだ」

「は? そんなの……どこにもないですけど」

つか佐藤さんのキャラクター名、ソルトだったのか。初耳なんですけど。え、じゃあ、佐藤ってのは本名? だから逆にソルトって名づけたのか? それともソルトだからカイが面白がって佐藤って呼んでるの? 「佐藤さん」は「砂糖さん」が正しかったのだろうか……。

「あ、じゃあ。私の頭の上にもO C T O っ出てるんですか? 見

えないけど」

ぐつと首を後ろに倒して上を向くが、洞窟の天井が見えるばかりで、名前などまったくない。

「あんたにはない」

なんで!?

「ないんだよねえ。オクト君には」

うーんと、腕を組んで首をひねる砂糖さん。

そういえば、初めて会ったとき、砂糖さんは私を見て攻撃態勢に入った。あれはひよつとして私の上に名前が出ていなかったから、敵と間違えての行動だったのだろうか……。

「オクト君の場合。色々といレギュラーが発生しているみたいだし、名前も何かエラーで表示されないのかなと思っていただけ。まさかオクト君から僕達の名前が認識できていないとは思ってなかったよ」

いくら目を凝らしてみても私の上にも、彼らの上にも、何も見えない。

青い人の上に fallen angel SEIMAKYONARU 文字が浮いているのを私もこの目で見たかった。

「えーと、フォールンエンジェルセイマキョー君？」

砂糖さんに呼びかけられると、青い人はひくつと頬を引き攣らせた。

「その呼び名はちょっと……」

「ですよー」。

「え、じゃあ、墮天使君？」

「いや、それも……」

「うーん、じゃあ聖魔キョー君？」

「……」

もう青い人は今にも泣きそうだった。

砂糖さん、それ、わざとじゃないですよ？

「あ、じゃあ、伊達で！」

と叫んだのは青い人ではなく、私だった。

さすがにこのまま天然砂糖さんに甚振られるのは可哀想だ。

「ああ、いいね。呼びやすいよ。伊達君か。フォーレンエンジェル
セイマキョー君って呼ぶのは舌を噛みそうだしね」

え、そついう理由？

「いいんじゃない、伊達で」

と、どうでもよさそうなかイ。

「え……あの……普通キョウになるんじゃないあ……？」

なんて、青い人がもごもごと呟いていたけど、ほっとしつつ。

こうして、青い人改め、フォーレンエンジェルセイマキョー改め、伊達と、私達は行動を共にする事になった。

無窮の王と、変態の王と、無謀の王と、猫耳の王と、

「伊達君は無窮の王に挑戦しにここへ？」

伊達の傷を魔法で癒すと、砂糖さんは尋ねた。

「はい。ノートの泡を手に入れたので、六人でパーティを組んできたんですが、雷の音がして……」

伊達は力なく首を振る。鮮やかな青い髪が、その動きに合わせてゆらゆらと揺れた。

「気がついたら洞窟の中で一人だったというわけか……」

伊達を気遣うように、気の毒そうにかけられた砂糖さんの声に、伊達はまた、首をふった。

「いえ、手前の千古平原にいたんですが、こんなことになって……街に戻って見ようかとも思ったんですけど、どうせだからちよっとだけ洞窟の中を見ていこうかなって」

馬鹿ですか。

「一人で洞窟内にわざわざ足を踏み入れたのか。レベルは？」

「侍の67です」

「無謀だな」

伊達の答えにカイはため息を零した。

「無謀だねえ」

と、長い尻尾で猫耳をかきながら、砂糖さん。

「はは、ローチリアの群れに囲まれると思わなくて……さっきは助かりました」

伊達は面目なさげに頭を下げた。

「いや、お互い様だしね。ところで騎獣は？　まさか徒歩で千古平原まで来たわけじゃないだろ？」

「それが、蹄駝できたんですが……」

そこまで言いかけて、伊達は言いづらそうにもごもごと口を動かして目を伏せてしまう。

「洞窟の前で降りた……んだね？」

目を開いた後、ふうと砂糖さんは息を吐いた。

「はい」

伊達は目を合わせないまま頷く。

「蹄駝ってなに？」

二人の会話を聞いていた私は、そつとカイの肩をつついた。何やら新しい単語が目白押しで話しについていけない。

無窮の王、はなんとなく分かった。この久遠の洞窟のボスだろう。ノースの泡は、久遠の洞窟に入るためのカギのようなアイテムだ

ろうか。

で、問題の蹄駝だが、虎徹のような乗用の獣だろうとは想像がつくだけど……。

「騎獣の一種で、見た目は、まあ駝鳥だと思えばいい。虎徹と違って臆病な性質なので、ダンジョン内には連れて入れないし、降りると……勝手に街に帰る」

つまり、伊達は、気付いたら、墮天使聖魔キョー君の体で、モンスターが出現するゲームの中で、降りたら街へ帰ってしまうと分かっている大事な騎獣から降りて、難関のダンジョンに一人で突入したと。

「……………馬鹿」

思わずぼろりと漏れた本音に、伊達はむっとして顔をあげた。

「お前に言われたくねえし。なんの縛りプレイだよ、それ」

それを言われちゃうと、もう返す言葉がないんだけど……………なんてしおらしく黙ってたまるか。

「縛りプレイなわけないでしょ。どっかの無謀馬鹿と一緒にしないでよ。変態、すけべ」

「は！？　なんで変態なんだよ。変態はそっちだろ？　んな格好で久遠の洞窟にきやがって」

青髪二刀流男と、パンイチシルクハットに蝶ネクタイ。変態度合いとしてはいい勝負だと思うのは私だけだろうか。……………まあ、ちょっと勝ってしまったている感は否めないけれど。

「はあ？ だから縛りプレイじゃないって言ってんでしょ。私はあんたみたいな無鉄砲のパーじゃないっての」

「だったらなんで、そんな格好で、こんなところにいるんだよ！」
「知らないわよ！」

こっちが聞きたいっての。

私は真っ直ぐに、伊達の黒い（意外にも目は地味だった）瞳を見つめ返した。

「初プレイだったの。このキャラ作って、ログインしたら、洞窟の中だったの。もし私が、草原スタートで、足があったら、真っ直ぐに街に向かうけどね！。間違ってもダンジョン覗いて帰ろうなんて思わないわ」

反論しようと口を開きかけた伊達は、ちょっとした間、首を捻って黙り込んだ。

「ちょっと待て。つまり、お前のレベルは……」
「1よ！」

何か文句あんの？ と上から目線で問いかければ、伊達は瞋を吊り上げる。

「レベル1の役立たずに偉そうに説教されたくねーよ！」

「67あっても、頭の足りないヒーロー気取りより、分を弁えてるぶんだけましたっつもの」

「てんめえ……」
「なによ」

低い声で凄む伊達を、ふんつと腕を組んで睨み返す。
「ばちばちばちつと火花が散りそうなほどに、にらみ合っていると、不意に小さな影が視界の端に入り込んだ。」

「もう、その辺でいいかい？」

ピンと立ったふわふわの毛に覆われた猫耳。上に向かって伸ばされた尻尾が、ゆらゆらと揺れている。

特に口調が強いわけでも、不機嫌そうに顔を顰めているわけでもないのに、砂糖さんは怒っているのだと、ひしひしと肌を感じる。今この人に逆らうとやばい。そう、直感が告げていた。

「は……い……」

「もう、いいです……」

私と伊達が返事を返したのはほぼ同時だった。

「そう、じゃあ、そろそろ行くか。二人ずつ虎徹に分乗しよう」

柔らかい、けれど、どこか冷たい声音で言うと、砂糖さんは踵を返して自分の騎獣へと向かった。

普段温厚な人ほど怒ると怖いものである。

砂糖さんの目が逸れたのを確認してから、最後のひと睨みとばかりに往生際悪く、伊達に目を向けると、向こうも同じ考えだったらしく、ばっちり目があった。

「早くいくよ」

途端にかかる、柔らかくも冷たい声。

砂糖さん、後ろに目でもついているんですか!?

くわばらくわばら。

ふいつと伊達から目をそらし、はい、と幼児のように素直に返事をすると、私は砂糖さんの後に続くこうとして、背後からがっしりと腕を掴まれる。

何しやがる、この腐れ墮天使伊達が！

これ以上は無いほどに眉間に深く皺を刻んで、がんとばしの準備をばっちりと整えて振り向くと、冷めた小豆色の瞳と目が合った。

「あんたはこつち」

「へ？」

「いいから」

「いや、でも……」

砂糖さんの猫耳がいいです……。とは言えずに口ごもっている間に、私はずるとカイの虎徹の前に連れて行かれ、ひらりと飛び乗ったカイに引っ張りあげられ、気がついた時には元の定位置に戻ってしまっていた。

空に浮かぶは太陽とそれとあれ

私はカイの腕の中でゆらゆらと虎徹に揺られていた。

ぐつと身を乗り出して後方を確認すると、猫耳をぴこぴこ動かしながら周囲を警戒している砂糖さんと、その動く猫耳を物珍しそうに見つめている伊達の姿があった。

なんか……くやしい……。

「手綱を取りづらいから、前を向いていて」

はい。

にしても、なぜまたこの組み合わせになったのか。

やはりGの大群に出会ったときに、猫耳の誘惑に負けてしまったのがいけなかったのだろうか。思いつきり詠唱の邪魔しちゃったもんな。

くっそう、またロデオに逆戻りだ。………逆戻りだというのに、背中を守るカイの存在に安心感を覚えてしまっているのが、また悔しい。レベル差98の存在は大きい。

ふっと、周囲の色がまた一段、明るくなった。

「ねえ、カイ」

「出口が近いみたいだな」

「……………うん」

徐々に明るくなる洞窟内の景色。

土壁には「危険」「引き返せ」「何も見えない」「死を恐れぬものだけ、先へ進め」「駄目だ。行くな、奴は」等と言う落書きのよきな文字がいたるところに書きなぐられている。

目にした途端「ひいっ」と思わず声を上げてしまい、カイに「作

り物だから」と突っ込まれた、いかにも力尽きた冒険者然とした服装のガイコツの手には、『ノートの……』と書かれた紙切れが握られていた。

まるでお化け屋敷の入り口のような脅し文句や小道具を眺めながら、虎徹に揺られ、とうとう出口にやってきた。

洞窟をぐるりと囲む白い線。滲み出る陽光。その先は真つ白な光に包まれて何も見えない。

私はごくりと唾を飲んだ。

「出口だね」

「ああ」

背後でカイが頷く気配がする。

出口が見えたら、もっと嬉しいものだと思っていた。

待望の外の世界。

なのに、胸を閉めるのは不安ばかりで、どんとどんと鼓動が早くなる。

私の緊張が伝わったのか、カイがぼんと肩に手を置いた。むき出しの肩に当たる、なめした皮は、カイの体温に暖められて、ほんわりと温かい。

「カイ、行こうか」

砂糖さんが、虎徹を並べた。

「はい」

外の世界を既に見て知っている伊達だけが、やたらものんびりと構えていた。むかつく。

「アイギス」
「アイギス」

砂糖さんとカイがそれぞれにシールドをはる。
いざ、洞窟の外へ！！

虎徹の前足が白い線を越える。

尖った鼻先が、鬣が光にのまれ、私のつま先が線にかかった時だった。

キイイイイイイイイイイ

と、どこかで甲高い音がした。

膝が線を越えると、音が随分と近くなった。

そして、頭が、体が線を越えたとき、耳の側をジェット機が通り抜けたような、強烈な音の洪水に飲み込まれた。

たまらず、手で耳をふさぐ。

けれど、その音は耳鳴りのように、私の内側から鳴り響いて、頭の芯を激しくゆさぶった。

耳が痛い。

体を強張らせて、頭を押さえ込む私を、背後から伸びた腕がぐつと抱きしめた。

カイの腕だ。胸に回された腕を覆う鎧がひんやりと肌を冷やす。引き寄せられた背中にあたる鎧の硬く冷たい感触。

ああ、カイがいるんだ。

私はこつんと後ろに頭を預けて、体の力を抜いた。大丈夫。大丈夫。そう自分に言い聞かせると、急速に音は引いていった。

ふわりと頬をなげる風に、私はいつの間にか閉じていた目を開いた。

明るい日差しに目を眇めて見れば、広がる一面の草原。

風が吹くたびにさあつと揺れて、次々にその色を変える。

はるか彼方には、天高く聳える山が連なり。頂上から三分の一程

を白い雪のようなものが覆っている。

頭上を仰ぎ見れば、高く、澄み切った青い空。コッペパンのような丸くふわふわとした雲がのんびりと流れ、白い光をはなつ大きな太陽と小さな太陽が……………。

「カイ」

「なに？」

私の体を支えたまま、カイは静かな口調で尋ねる。

「太陽が二つあるんだけど」

「一つは月だ」

「ああ、そう……………」

私はぼんやりとそう答えた。

なんで月が出てくるの？　なんて考えても仕方が無いっいたら仕方が無い。

「昼に出るのは、蜥蜴の住む月トファルド。夜に出るのは兎の住む月イーシエ。ROは3時間ごとに二つの月が入れ替わって、6時間で日付が変わったんだけど、今はどうなのかな」

なんだか忙しないな。

「ところで、カイ」

「……………なに？」

「あれ、なに？」

手をかざして見つめる白い太陽に、ポツンと現れた黒点を指差して、私は尋ねた。

すごく嫌な予感がするんですけど。
私が指し示した先を認めたカイは、「くそっ」と珍しく悪態をつ
く。

「佐藤さん！ コアトールです！」

「ああ」

アイギスを維持したまま、カイが槍を抜く。

ぐんぐんと大きくなる黒点。

呆然と見入っていると、ぐいつと頭を押された。

「伏せ！」

やっぱりいいいいいい。

力が重要

「獄灼炎」

カイの槍に炎が灯る。

「雷電」

と、同時に伊達が二振りの刀に雷を宿した。

落下するように猛スピードでつつこんでくる黒い点が、その昔図鑑で見たプテラノドンのような翼竜の姿形をしていると分かるほどに近づいた時、伊達が刀を持った右手を大きく振りかぶった。

「待て！」

それに気付いたカイが鋭い制止の声を上げる。

が、すでに反動をつけてしまっていた腕から、刀は空へと飛んでいき、

カキンッ

と、翼竜にぶつかる手間で何かにはじかれた。

「あ~~~~っ!？」

伊達が間の抜けた声をあげる。

くるくると回転してどっかに飛んでいく刀。

あーあ、この草原の中に落ちたら探すのが大変そうだ。

緑の中に消えていく刀を伊達は悲しそうな目で追っていた。

しかし、制止の声を上げたカイと砂糖さんは近づくとプテラノドンもどきを凝視して刀には目もくれない。

「……あれは、コアトルじゃない。コアトルカだ！」

「カ」がついたただけな気がするが、何がどう違うのか、砂糖さんの声は明るく、喜色をあらわにしていた。

「ねえ、カイ」

「……なに」

「カのあるないがそんなに重要なのか？」

「コアトルはマップを移動中にごく稀に遭遇する、ワイバーン型の敵。空中から攻撃してくる為、接近戦用の武器だと命中率が15%まで下がるから、嫌われてる」

私はちらりとカイの槍を見た。

青い炎が灯されたそれは、接近戦用？

私の視線に気付いたカイが、己の槍に目をやる。

「槍は、中接近だから、35%。で、コアトルカだけど」

カイが説明を続けようとしたその時、激突する勢いで、真っ直ぐに迫っていたプレラノドンもどきが、びゅわんと風を生み出しながら急旋回する。虎徹の鼻先すれすれを、翼の先についた鋭い鍵爪が通り過ぎていった。

「魔獣使いによって降され、その騎獣となったコアトルをコアトルカと言っんだ」

ほぼ90度にターンして、ごうごうと風を切りながら遠ざかっていくコアトルカ。

私は、その背中に乗る人物を呆然と眺めながら、カイに尋ねた。

「あの極楽鳥……プレイヤー……かな？」

コアートルカの背中には虎徹の背にあるのと同じような鞍がつけられてあり、確かに人が乗っていた。

間近で目に出来たのはほんの一瞬で断言はできないけれども、孔雀の羽を彷彿とさせる羽飾りのついた帽子に、真っ赤なジャケット、ネクタイなのかりボンなのか胸元を飾るひも状の物体は、白と黒のツートンカラーで、中のシャツはひよこのような黄色。さらに、ピンクやらオレンジやら、様々な暖色が斑模様に入り混じったタイツのように細身のズボン、極めつけは、表が紫、裏が真紅の長いマント……私の見間違いでなければ、出きれば見間違いであってほしいけど、コアートルカの背に跨っていた人物はそのような出で立ちをしていた。

「恐らくな」

そう言いながらも、カイの槍はまだ炎をまとっている。

かなり先まで地表すれすれを飛んでいったコアートルカは天空に向かつて、地面とほぼ直角に飛び上がり、そのまま大きく弧を描いて再び、私たちの頭上にやってきた。

私は手をかざして、まるでヘリコプターのようにホバリングする、コアートルカの白い腹を眺めていた。

「何やってるのかな……」

「さあな。警戒してるのか、品定めしてるのか」

どっちにしるずつと見下ろされているのはいい気分じゃないし、そろそろ首も疲れてきた。

「ユーザーさんですかー？ ゲームに取り込まれた方ですかー？
降りて話しませんかー？」

砂糖さんが、空に向かって声を張り上げた。
するとコアートル力は迷っているように、小さく円を描いて空中
をうろつろと飛びだした。

おお、反応あり。

けれど、高度を保ったままで、降りてこようとはしない。
やはり警戒しているのだろうか？

「おい。降りてきてくださいーい。私達も、多分あなたと同じです
ー。敵じゃないですからー」

砂糖さんを倣って私も声をかける。

「そうですよー。助け合いましょー」

「降りてきてー」

「大丈夫ですよー」

「攻撃なんてしませんからー」

「今は敵もいませんし、地上も安全ですよー」

「おーりーてーきーてー」

佐藤さんと私が交互に声を張り上げていると、ようやく「コアトル
ル力は下降しました。」

「心配しないでー」

「そうそう、仲間ですよ。なかまー」

声をかけ続ける砂糖さんと私。

ちびちびと折り続けて、ようやく1メートルほど頭上までやって

来る。と、ひよこりと派手な帽子を手で押さえた、逆さまの顔が現れた。

「ユーザーさん……だね？ 会えて良かった」

未だ警戒の色が見える極楽鳥人間を安心させるように、砂糖さんはほわっと笑みを浮かべる。

しかし、極楽鳥人間は胡散臭いものを見るような顔になって私達を見回した。

「よう言つなあ。さっきの刀はなんやねん」

慎重な行動を見せるわりに、その口調は飄々としたものだった。

「しかも、そっちのヤクシャはなんやの。槍燃やしっぱなしやん」

「ごもつとも。」

「カイ。消しなさいよ」

槍を持つ手をつつけば、しばらく間を空けた後、カイはしぶしぶといったたていで炎を解除する。

しかし極楽鳥はまだお気に召さないらしい。ちろりと胡乱気な視線を虎徹の周囲に向けた。

「おおー、ご丁寧にアイギスまでかけて。地上で不利なコアートル力に乗つとる俺に降りてこい言つといて、あんたらはばっちり防御御済みかいな」

「すまない。今とくよ」

砂糖さんはさつとアイギスを解除すると、カイを振り返る。目で、「解け」と訴えるが、カイが動く気配はない。

「ヤクシヤの兄ちゃんは、俺とやる気まんまんなんちゃうの?」

つつと極楽鳥は砂糖さんを見る。彼がリーダーだと、とつたらしい。

「そんな事はない。我々もこんな事態になって少々困惑しているんだ。カイ」

再度振り返った砂糖さんの目には微かに非難の色が浮かんでいた。

「……………さつき」

砂糖さんをはじめ、伊達や私、極楽鳥の視線を一身に受けながら、カイは静かに口を開いた。

「雷電のかかった刀をどうやって弾いた? 魔獣使いに全方位防御は使えないはずだ」

きつと鋭い視線をカイは極楽鳥に向ける。

砂糖さんははつと息をのみ、伊達と私はうーんと首をひねった。魔獣使いが使える魔法が分かりません。

「そりゃあ、あんた……………企業秘密や」

にいつと唇の端を吊り上げると、極楽鳥は「あー、頭に血いのぼったわ」と呟いてコアトルカの上へと引っ込んだ。

ひょっとしたら、そのままどこかへ飛んでいってしまうのではな

いかと思ったが、意外にも、コアートルカは私たちの前方へ少しずれて、地面に着地する。

すたつとコアートルカから飛び降りた人物の装いは、オクトの動体視力の優秀さを物語っていた。残念だ。

「なんてな。冗談やん。そんな怖い顔すんなや。一か八かこれではじいたつたんや」

おどけた口調でそう言って、極楽鳥が指し示したのは、腰に下げた鞭だった。

リクドーコレクション

「いやあ、まさか雷電かかっているとかわへんかったから、ビリビリしびれてびっくりしたわ」

腰に手を当てて、極楽鳥はへらっと笑った。

「驚かせて申し訳ない。僕はソルト……だけど、皆、佐藤と呼んでいる」

砂糖さんは虎徹から降りると、ぼてぼてと極楽鳥に近づいた。

「で、ヤクシヤはカイ。水色の髪のリヨースがフォールンエンジェルセイマキョー君こと、伊達君で、シルクハットの彼がオクト君だ」
こちらを振り返りながら砂糖さんは、一人ずつ名前をあげていく。

「丁寧にどうもー。もう分かっていると思うけど、俺はロクや。よろしく」

羽のついた帽子を手に取ると、ロクは方足を引いて恭しく頭を下げた。

言動の一つ一つがどうにも芝居がかかっていて嫌みったらしい。けれど、同じ苦境に立たされた、何人いるかも分からない仲間なのだ。仲良くやっていかなくては。

挨拶に行くために虎徹から降りようとすると、肩をぐっと掴まれた。

「どうも気に食わない。気をつけて」

そつと耳に吹き込まれた言葉に、私はちらつと背後に視線をやつた。

カイは眉を寄せて、極楽鳥ことロクを睨みつけていた。刀を弾いたことをまだ気にしているのだろうか。

でも、私だつて蝙蝠傘を投げてノスフェラトウに命中させることが出来たんだし、服装の趣味はともかく、強そうなコートール力なる騎獣に乗れるほどのレベルの人なら、やろうと思えば出来るんじゃないのだろうか。何事もなせば成るものだ。

「まあまあ、貴重な仲間じゃない」

ぼんぼんと腕を叩くと、カイはむつとする。

分かっている。私がレベル1の裸族のラッキーボーイだから、心配しているのだということぐらい。

「ちゃんと気をつけるから」

そう言葉を付け足すと、ようやく納得したらしいカイは、アイギスを解除して自身も虎徹から降りた。

ロクの方へと歩き出せば、刀が飛んでいった方向に時折目をやりながら、伊達も後をついてくる。

「カイです」

ロクの前に来ると、私を隠すようにして、さつと一步前へ出たカイが、会釈程度に頭を下げた。

「えーと、色々あって伊達になりました。よろしくお願いします」

いったん刀への未練を振り切った伊達が、ぺこりと挨拶をする。

「オクトです。レベル1の新参者です。よろしくお願いします」

ささつと、カイの背後から体を横に滑らして、ロクに笑顔を向ける。

最初が肝心だ。

「ああー、よろしくー」

「はいはい。よろしくなあ」

等と、カイと伊達の挨拶にへらへらと答えていたロクは私を見るなり、目を見開いた。

「あんだ……………」

うん、もう、分かっていますから。だから何も言わないで！

「はは、えーと、成り行きでこんな格好してますが、断じて私の趣味では……………」

私は体を隠すように蝙蝠傘を広げながら、視線を落として言い訳を始める。

その落とした視界にロクの派手な羽飾りがふわりと入り込んだ。地面すれすれの位置をふわふわと揺れる羽に、え？ と思って顔を向ければ、ロクは膝と手について四つんばいになってうな垂れていた。

「なんて、ことや……………俺はまちがったんか……………。派手にするばかりで、基本を見落とし取ったわ。くそつ、俺の負けや！」

ロクはがばつと頭をあげて立ち上がると、食い入るように私を見つめた。

「オクト言ったな。あんたのセンスには脱帽したわ。俺の完敗や！けどな、次は負けへんからな！」

ぎらぎらと光る挑発的な目でロクは私にびしいつと指を突きつけた。

何言っちゃってるんだ、この人。

「いや、どつちかってーと、負けたいんで……、つか、次があったらかなり嫌かなーなんて……」

一歩、体を引けば、ロクはずいっと二歩進んで距離を詰める。

「なんや逃げるきか？ 今から弱腰でどうすんねん。あ？ それともあれか？ 俺やったら勝負にならへんって、言いたいんか？」

えーと、どうしよう？ と隣に立つカイに視線で伺う。

と、ふいっと目をそらされた。

あ、逃げやがったな、このやろう。

そんな私たちのアイコンタクト中にもぐいぐいと詰め寄ってくるロクに、私はふるふると胸の前で手を振ってみせた。

「そんな、滅相もない。私なんて黒一色で纏めただけですから。ロクさんの素晴らしい原色使いにはとても及びません、ええ本当に、全く及ぶ気がしません……その素晴らしい配色のマントはリバーシブルですか？」

つつと真紅と紫の痛々しいマントを指差せば、ロクはぱあつと満面の笑みを浮かべた。

「おっ、あんた分かるんか。この色のバランス。なんや、兄ちゃん、ええ奴やん。悪かったなあ、絡んで。よろしくなあ」

今泣いた烏がもう笑う。子供のように、ころつと態度を変えたロクは、蝙蝠傘を持った私の手を掴んでぶんぶんとふった。

なんかもう色々についていけない……

カイの言つとおり、確かに気をつけたほうがいいのかもしいれないと、恐らくカイとは全く違う意味で思った。

ル〇ラがあれば

「ほんで、あんたらこれからどうするんや？」

自らのスタイルのポイントを語り尽くし、私の格好を一通り褒めちぎった（肌色と黒の対比の美しさや、裸の首筋ですべる蝶ネクタイの揺れ具合の優美さ、慎ましやかなシルクハットの存在感などなど。その間ものすごく居た堪れなかった）ロクは、がしつと私の肩を抱いて、皆を見回した。

ロクの話をもとに左へと流していたカイと、刀を探しに行つて、結局見つけられずに帰ってきた伊達、同意を求められるたびに、尻尾で頬をかきながら、引き攣った笑顔で頷いていた砂糖さんは、困惑したように、顔を見合わせた。

「そついや、まずは洞窟を出ようってことで、その先は相談せずに行動していたもんな。」

「なんや、何も考えてへんかったんかいな」

ロクが呆れた様に呟く。

「はは、面目ない。そうだな、まずはやっぱり街へ行ってみようかと思っただけど」

砂糖さんはちらりとカイを見た。

「俺も街へいくのがいいと思います。俺達以外にもプレイヤーがいれば、やっぱり街に出ると思っんです。そうしたら合流できますし」

砂糖さんと、伊達はカイの言葉にうんうんと首を縦に振る。

ちなみに私も首肯しておいた。

「ふうん……………」

纏まったと思った意見に、ロクが首を傾げた。

「街言つても、いっぱいあるやる。どの街に行くつもりや?」

ロクの言葉に伊達が口を開く。

「千古草原の一番近くの街…………アロンアールじゃないか?」

一歩入った途端、くっついて動けなくなってしまうような名前の街だ。

「あほか。アロンアール行ってどうすんねん」

アロンアールの名前を出した伊達の頭に、ロクは手刀を落とした。

「行くんやったら、ロップヤーンやる」

「ぐあっ」と呻き声をあげ、頭を抑えてうずくまった伊達に、ロクは呆れたように声を落とす。

「あそこには、メインボードがある。どこに何人おるか一目でわかるやる」

私は、つんつんとカイの肘をつついた。

もう、何も言わなくても私の言わんとしていることが分かったのだろつ。

カイはふうと息を吐くと、控えめな声で説明を開始する。

「ロップヤーンには全エリアのログイン中のプレイヤー人数が、マップごとに分けて表示されるボードがある」

んじゃ、そこに行けばいいじゃん。

「だが、遠い」

「そうだねえ。アロンアールに寄ってみてからでもいいんじゃないか？ 物資の補給も出来ればありがたいし」

砂糖さんは、虎徹にくくりつけられた頭陀袋に視線を走らせた。

いくらMP自動回復がついているといっても、MPを大量に消費するらしいアイギスを連発して洞窟を抜けてきたおかげで、かなりの数のリンデンを消費していた。

「まるつきり逆方向やる。あんたらはちょっと寄り道程度の感覚かもしれないけど、そっちのハイセンスな兄ちゃんにはこの地域の敵はまずいんちゃうの」

ハイセンス……普通にとらえると嫌味にしか聞こえないんだけど、ロクにとつては純粹な褒め言葉だ。

けど、ちららんぼらん外見と、ちよつと常軌を逸した言動から、いい加減で喰えない奴だと思っていたけれど、意外と色々と真面目に考えているらしい。

彼らの話を分らないなりに、ふんふんと頷きながら聞いていた私は、ふとある事に気付いた。

広大なマップを移動するRPGになくはならない、あれの存在を思い出したのだ。

「あー」

「おずおずと手を上げると、皆の視線が集中する。」

「街へ帰る魔法……ってないの？」

私の言葉に、皆は各々の顔を見回して、むうと眉を寄せた。

「ある」

「なら、それで」

「帰ればいいじゃんと言いかけた言葉を遮ってカイは、ひたと私を見据えた。」

「けど、パーティを組んでる相手じゃないと一緒に運べない。俺達が今、パーティを組んでる状態にあるのか確認するべきがない」

しんと沈黙が落ちた。確かに、一緒に行動して、助け合ってきたけれど、設定画面を覗けるわけじゃなし、どうなってるのかなんて分からない。

「ちなみに、帰還魔法のレヴェニーオを使えるんは、魔道士の猫ちゃんと、魔道騎士の怖い兄ちゃん、それから魔獣使いの俺だけやな」

つまり、各々がレヴェニーオで帰るとしても、私と伊達だけは取り残されると……。伊達と二人きりとか……。

「思わず伊達を見ると、向こうも丁度私に顔を向けたところだった。目が合った途端に、げえっと口元を歪める伊達。こっちだって、あんなに取り残されるとかごめんだったの！」

「それになあ、レヴェニーオはワープやなくて、こっ、空をびゅーんって飛んでいくような魔法やねん」

ロクは指先で空に山形の曲線を描いた。

「俺、高所恐怖症やし、無理やわ」

え？

皆が一斉にロクの顔を見つめた。

「……コアートルカは……」

皆が皆、絶対に抱いたであろう疑問を、代表して口にすれば、ロクはにかつと笑う。

「あー、もう、半ベそかきながら乗っとるよ」

嘘臭い。

半ベそかいてる人が、あんなアクロバットに飛ぶものか。隣に立つカイの顔が険しくなる。

「んー、そっや、こっしよ」

言うなりロクはぐいっと私と伊達の腕を引っ張った。

「オクトと伊達は俺が運んだるから、あんたらはアロンアールに寄って物資補給してから来たらええわ。レヴェニーオ使うなり、虎徹走らせるなり好きにしたら」

思ってもみない強い力だった。強引に引っ張られて、たたらを踏

みつつ、ロクに倒れ掛かった体を支えるようにして、派手な服に包まれた腕が首に回される。

「おいっ！ 勝手に決めるな」

カイが声を荒げて、ロクを睨みつけた。

「この二人がおるより、あんたら二人だけの方が楽やろ」

ぐっと言葉につまったカイを見るに、ロクの言う通りなのだろ。

ロクに従うべきなのかもしれない。けれど、カイと砂糖さんと離れ、どこか得たいのしれないロクと、フォールンエンジェル伊達と三人で行動するのはちよつと怖かった。

「オクト、こっちに来い」

ロクにもたれかかったまま、惑う私に、カイが腕を伸ばす。

ほっとして、その腕を取りかけて、私は伸ばしかけた腕を止める。カイと砂糖さんと離れたくない。でも……でも……またノスフェラトウのような敵が現れたら、私を庇って二人に何かあつたら……。

「オクト」

低いカイの声。じっと私を睨む赤い瞳は、彼の怒りをひしひしと伝えていた。

そつとカイから目をそらすと、私は腕を下ろした。

「決まりやな」

ロクの軽い声音が聞こえたかと思うと、ぐいっその後ろから何か

股をわって入り、私の体は宙に持ち上げられた。

くると空中で一回転した体をさっと、背後から伸びた腕がキャツチする。

目まぐるしく動く視界が落ちついた時には、私はコアートルカの上で、ロクの腕に抱えられていた。どうやら股を割って入ったものは、コアートルカの頭で、そのまま首を伝って背中に運ばれたらしい。

「おいっ！」

「ちよつと、待ってくれ！」

「うっわ、ちよつ、マジ!?!」

カイの怒声と、砂糖さんの困惑した声と、伊達の素っ頓狂な叫び声が同時に響いた。

ばさりつと、羽をはたかせ、コアートルカの体が宙に浮く。

「獄灼炎」

カイの槍が赤く染まった。

実力行使で止める気!?! もう浮いてるんですけど!

私は思わず、ロクにしがみ付いた。

けれど、カイが槍を振りかぶる前に、コアートルカはぐんつと飛翔して、射程外へと逃れる。

「じゃあなー。ロップヤーンで待っとるわー」

どンドンと離れる地表に、私はロクにしがみ付いた腕に力を込める。

「ぎゃあー……」

と伊達の絶叫が聞こえた。

垂直に上昇したコアートルカの背から、カイと砂糖さんが豆粒のようにしか見えなくなった頃になって、私はようやく、伊達がどこにいるのが気付いた。

コアートルカの嘴に啜えられた……。そりゃ叫ぶわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2031y/>

○月×日、今日は快晴

2011年11月24日02時58分発行